



特別
本 3
3927





物産実録秘書

全

三三 長崎諸物産実録秘書 極大形三十三葉
平賀源内撰 宝曆九年八月山尾春昌写之
全編物産絵図 ひらかな解註
望三英、小野蘭山、渋谷柚齋旧蔵印

門 3
號 3927
卷

桂華藏書

弘前醫官澁江氏藏書記

農書藏記

望月三吳

明治六年五月段

海江柳齋

安政五年八月段

小野蘭山

文化七年正月段

桂華藏書

弘前醫官澁江氏藏書記

昭和三十三年十一月十六日購求

36-3399
36-3375

唐菜 漢名松

唐菜ハ花崎ヨクク
也 他果ノ後種ヲ
一年ハ生テトクモ

次年ニ育テ 其物ノ大ニシトモ 京京トシテ 作ルル菜ト
他果ヨクク 出来タルヨクク 其味ハ 甘クシク 漢ノ漢ノ
其味ハ 甘クシク 種モ 八ノ下ニ 生テ

高菜
漢名春不老

高菜是也 其味

其味ハ 甘クシク 他ノ地

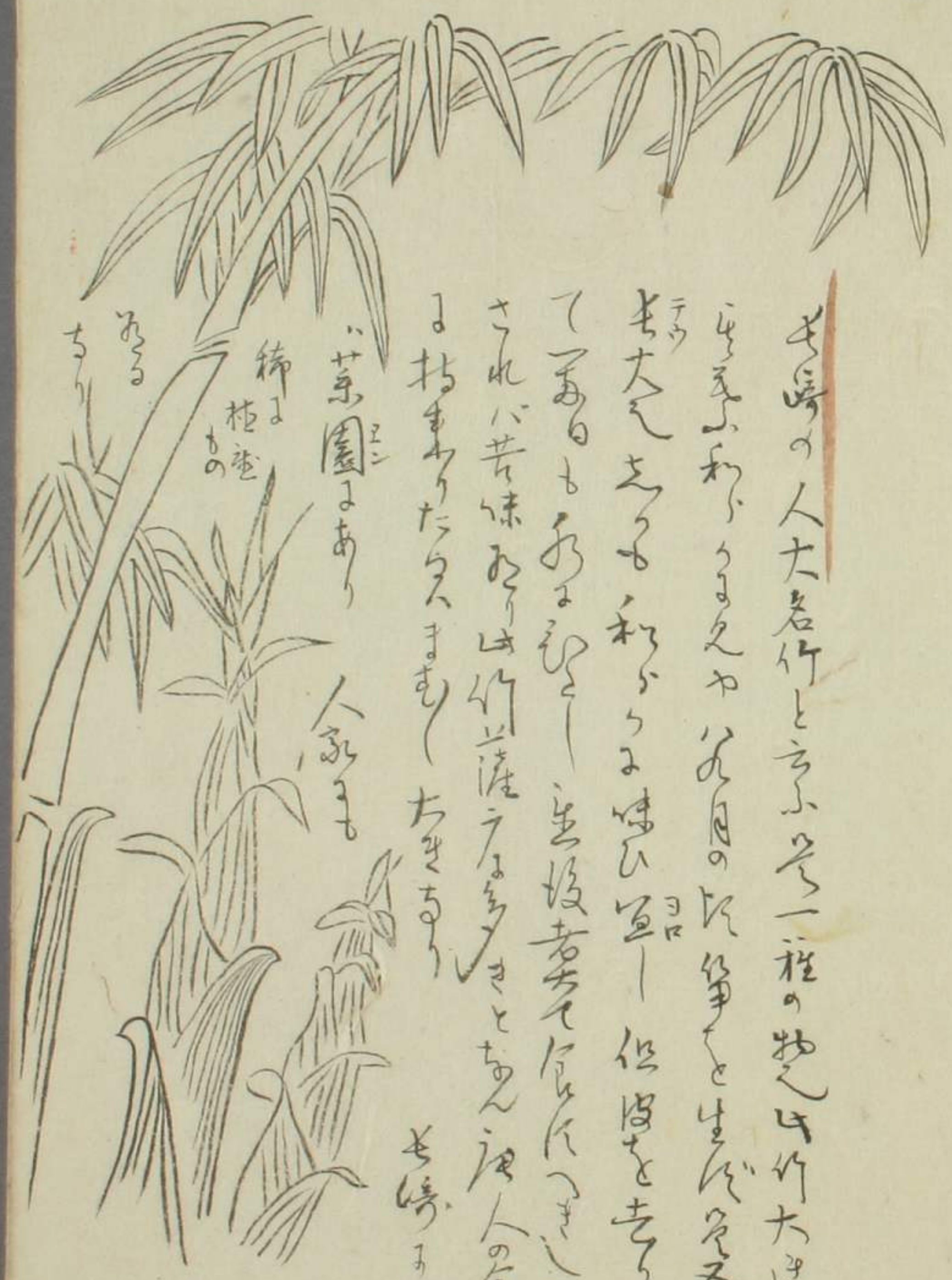


此ハ 唐菜ノ葉ノ大ニシトモ 京京トシテ 作ルル菜ト
其味ハ 甘クシク 種モ 八ノ下ニ 生テ



農書藏記

藤ハモ倭ヨ流行^{ハヤル}ふと有りとしふをわすれしとて一葉も
わして今料トすもの多しぬと云ふハ新種トす之もや一やふを
中切ハ入れぬハ使て二日陰干日ありのよきものを蓋て細く多斗桶椀
の物ハ入れぬを去り甘藷を多く楯ハをきね音乾一斗桶入れ
切て水を去り甘藷を楯ふくは入耐水を入ねて水去り
甘藷をおるより昨日のよき甘藷のよきもあつていさふれだ
七斗斗して葉ハ一寸程出るを度とていさふれだ
ふつとる一斗斗してはもやせに
一斗斗してはもやせに



甘藷ノ人大名竹ト云ふ是一種ノ物ハ竹ト云ふ
に似ふれども久や六月の頃節を生長る又或
者大気志るも和ふるといひ宜し但皮を去りやり
て食もあはれなり其故若くは竹ト云ふも
されハ苦味ぬハ竹ノ産る多しとてん唐人ノ名料
ト持来りたりしなりちきあり

甘藷園あり
人取も
稀に
柑を
もの
あつ
ちき

甘藷子て

唐冬瓜

唐種の冬瓜は唐人館内採り唐人自ら作りて合料と
 するなり
 此を児玉と云つて長大之十口切りて



其長一尺四五寸許り其七三尺四五寸

日本にて作る冬瓜は緑色の上白粉あり彼地の冬瓜は白粉
 あり

橄欖

橄欖は唐の唐人寺宗福寺あり其實を種る人多し其とも
 一尺許りよ玉と云ふは橄欖の實を種る人多し其とも



対州風菜

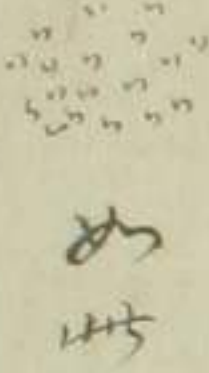
大葉の風菜よそまつく巻ひらくもの
 葉をふちま固も付くものよく巻ひ増らす
 葉はひよふあぢれん枝
 フジエ 樹皮は
 腐樹は枝より一又小椀の
 毛よそ色も細くするは地よそこ
 ねく水をそとて 三月よ
 花をひらく白色を葉が白を
 横をまべきもの

名護蘭



くらくらつがゆ

くらくらつがゆ又^{ホウゲン}方^{とこの}言はせん^のりげとも云樹のやき二天^の泡もあり
 其葉は青木の葉の似てうすき^和れ^らし^枝の刺より^葉ハ^葉ハ^葉ハ^葉
 子のふたは似て大きなり
 葉はそれハ^葉葉^は葉^は葉^は葉^は
 帯びた葉あるものよそ
 一色味は甘く仁あり



辛味ありて舌を刺せん



如意樹

長崎古所傳云と云者の由あり生葉
相し似てゐて大樹也其花を向き色青
し秋實をむすふ大ききものごとく炒
食する地味也



漢名梧桐

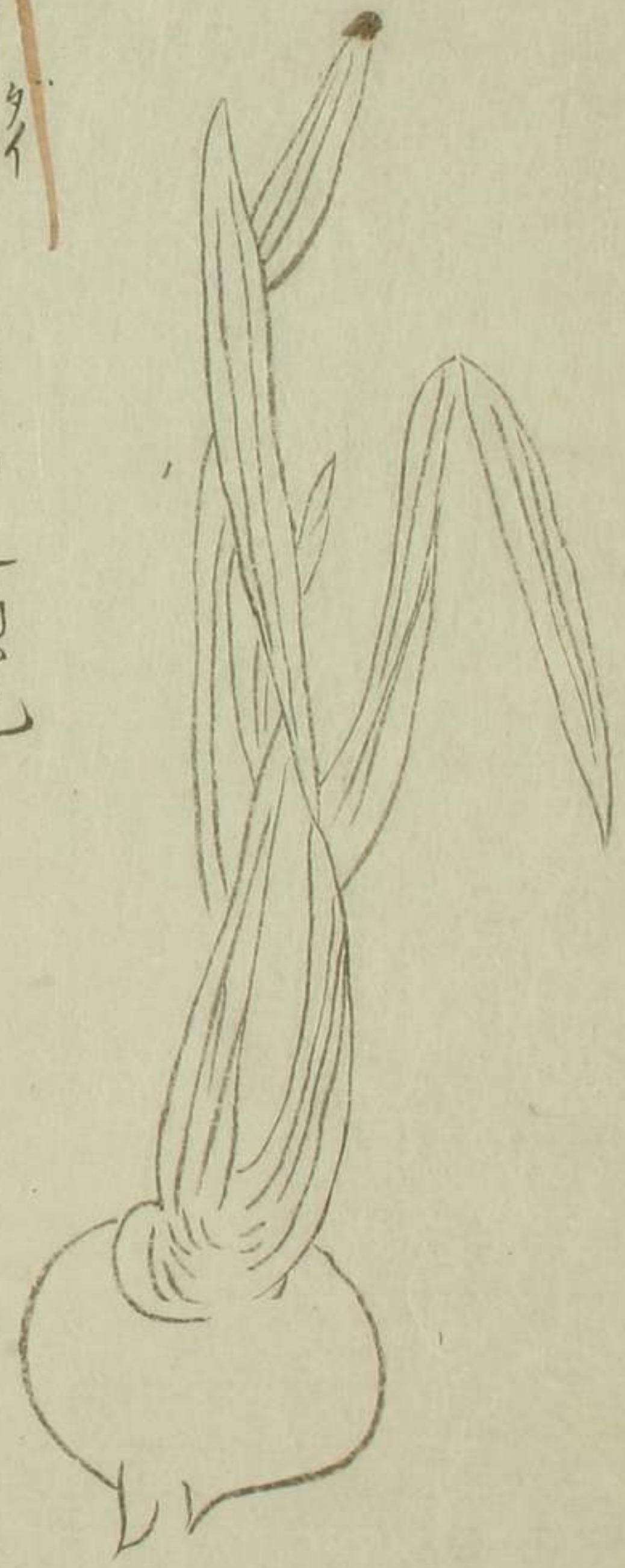
和名青桐

嶠陽の野菜

嶠陽の俗理菜といふ秋の菜花を煮りて油をひきし法腫抑痛
法陰子竹の皮を煮余國に秘傳あり理菜と異なり其葉蒼苔細花之
より古くあり京都東山菜ヶ濱の菜に似これに夫は粒油
小して別種に以東嶠陽の山理より多くあり形状花の通り

非雞兒腸
又非野菊
即野生單
葉菊花也





銀基タイ 水仙之類也

銀基之水仙は似て尺方ぐくく水仙の根園之花の葉
 乱る銀基の根平そ花の葉乱まざる也ワズカは葉を以て
 割とけ銀基の婦人の乳腫れを研り賜トて妙し
 其全種一の葉用はざる事あり大効あるもの也

とくひと

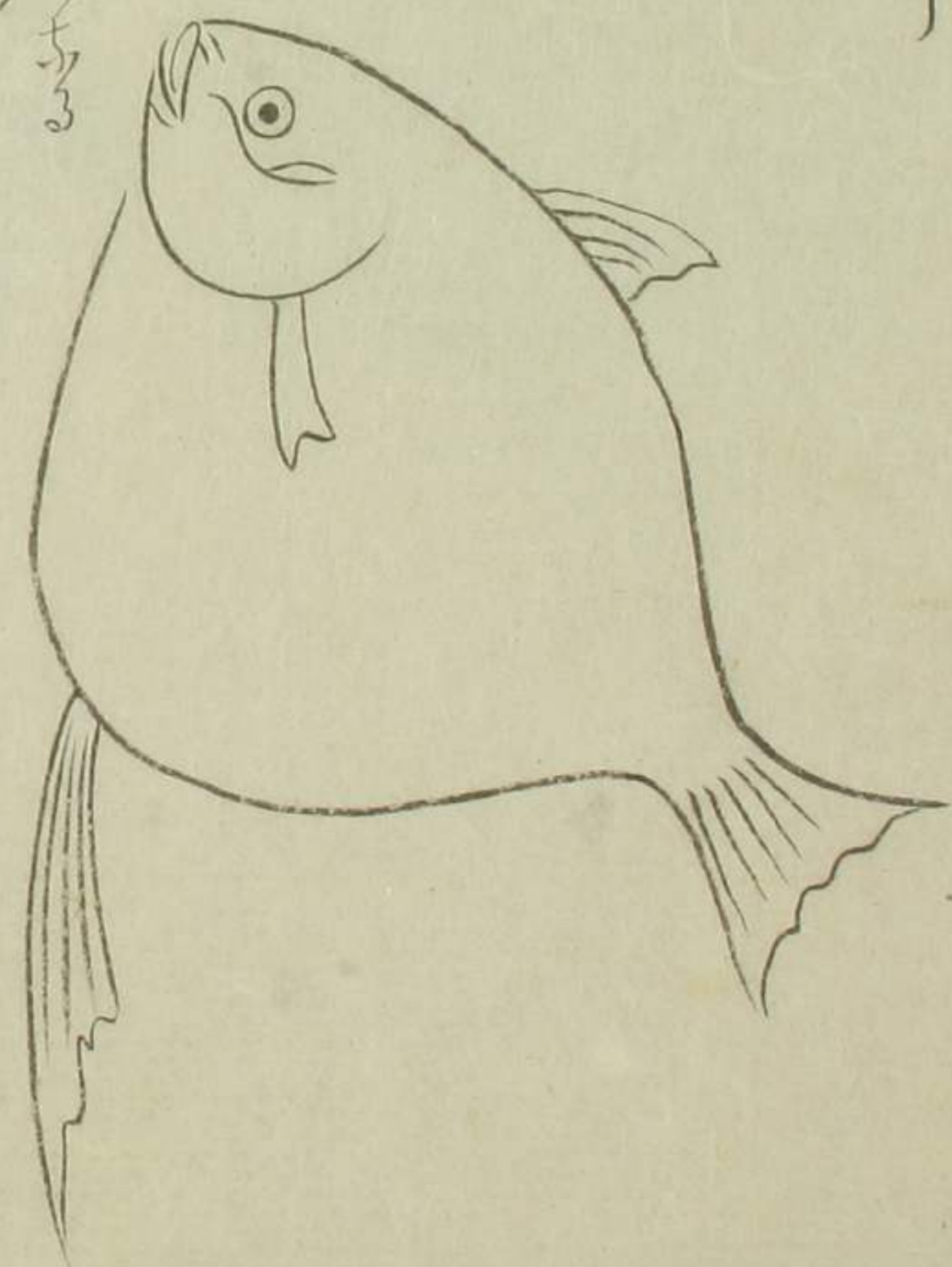
とくひと 佐渡の
 海中より五月迄
 魚ありとて佐渡に
 用中か佐渡より多し
 好く只貴家の家
 目出な客来とあつた
 是より葉やし出れ各裁く
 沢ふちるるとも佐渡村山某
 氏の方へ佐渡より送り来り
 同し佐渡村

干物なり色為黒きあり



タバコキリ
相草切包丁

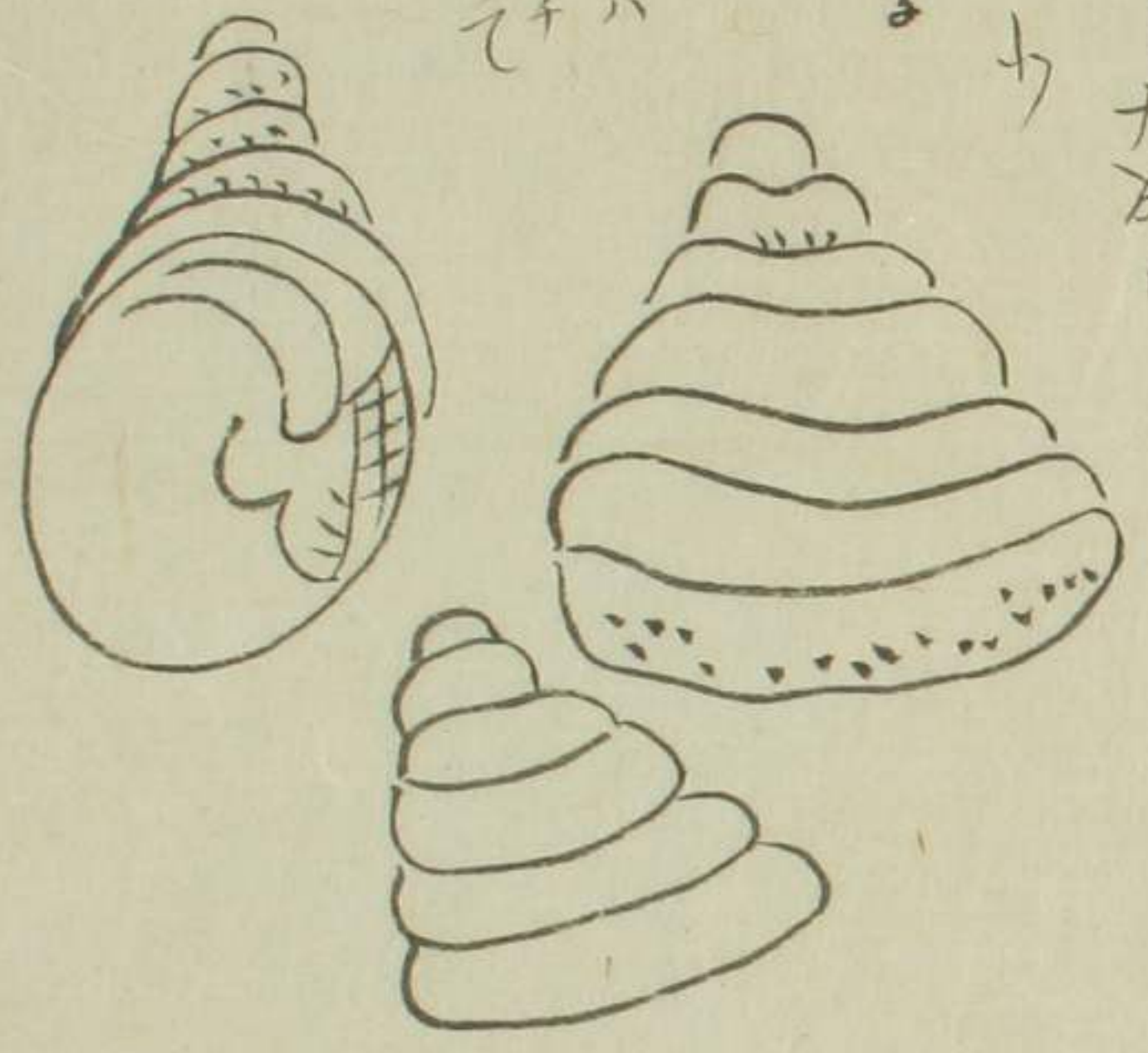
烟草切包丁といふハ
七崎の方をまゝくを
実者志れざる者ハ
其大さ并に厚さも
實に煙草の切の如く
刃のくま色脈の
くまが身より白く
其より形ハたゞ
楕圓に似たり



楕圓に似たり七崎にて鏡並を味ふもの也

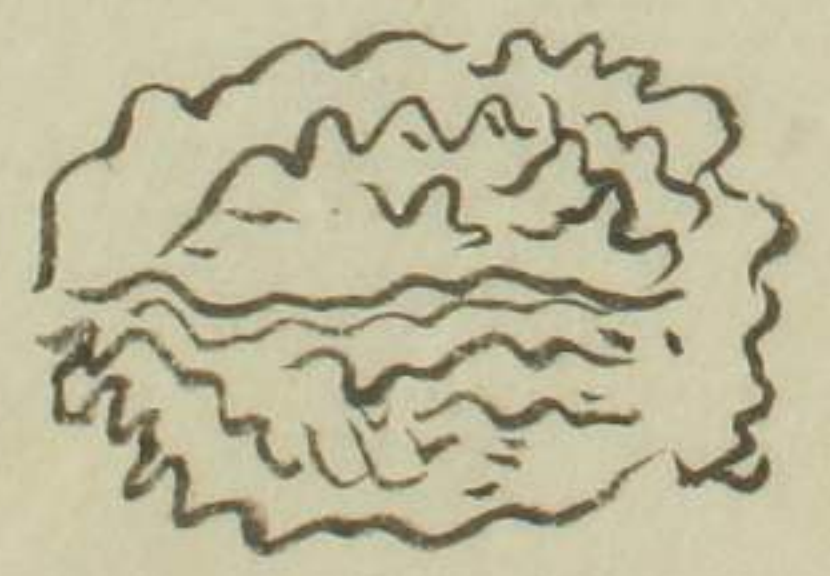
尻高貝

長崎より有り大なり
其のくまくま
ちふれ鶏子
のくま素
て信ふ貝ハ
あまのくまを穿て
何もの
あり



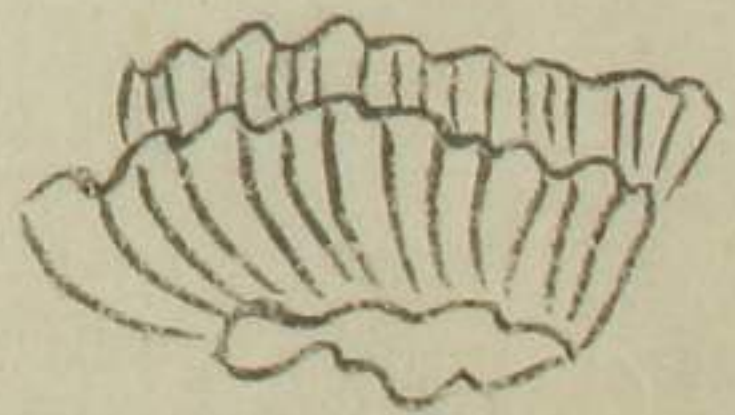
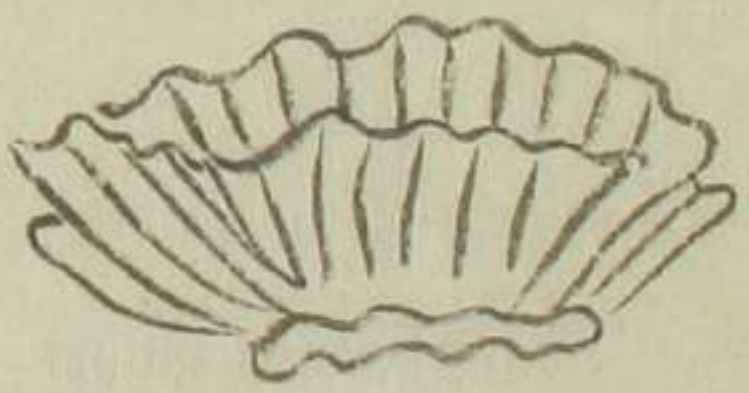
金貝

金貝ハ大草海中より出
其のくま味はまろく
尤も其の味はあり、海地の人
其を再び田の糞とせんとし
其を干し針を付海産は採
其を纏ひて其を海産子付
揚る貝あり



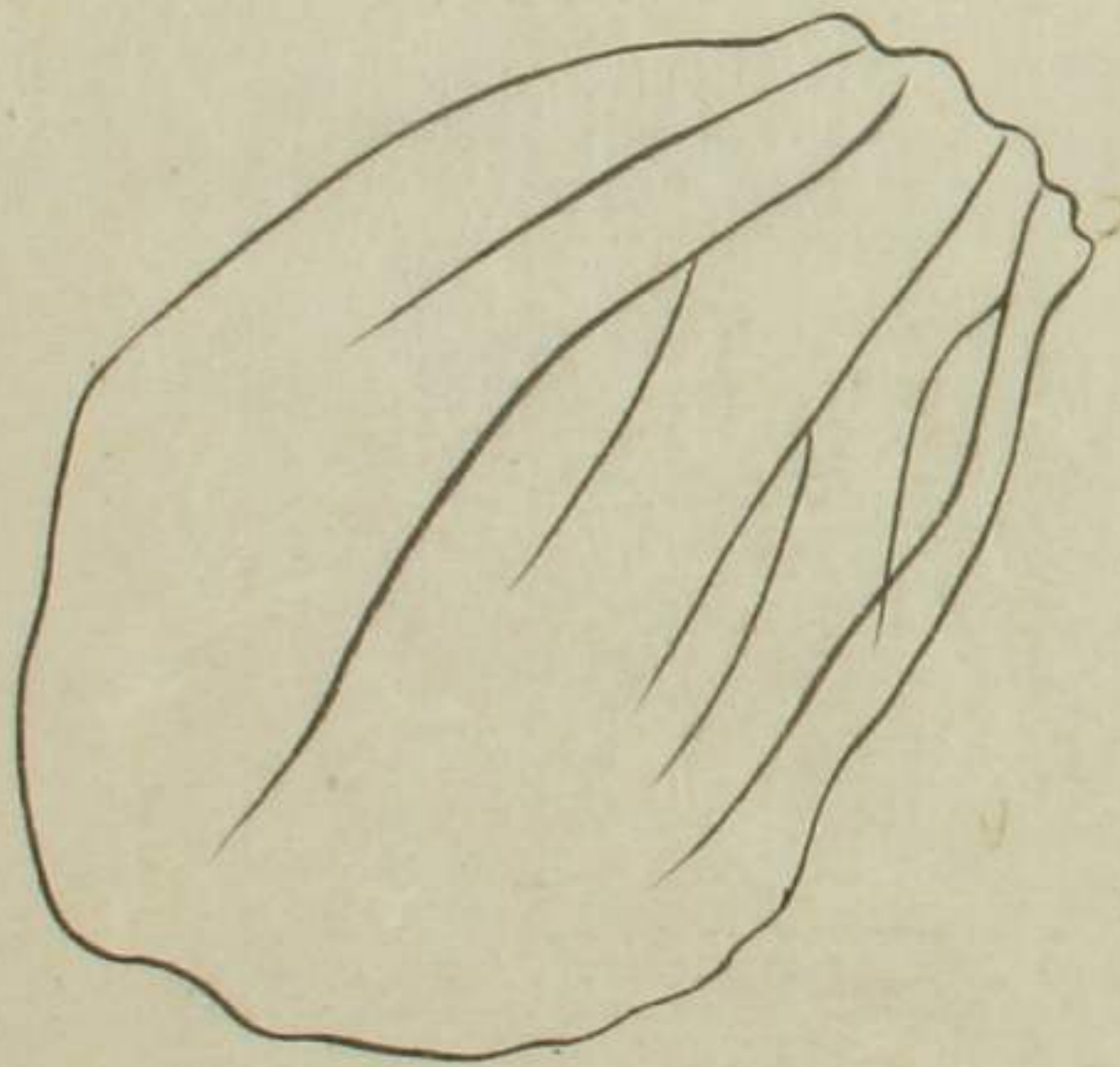
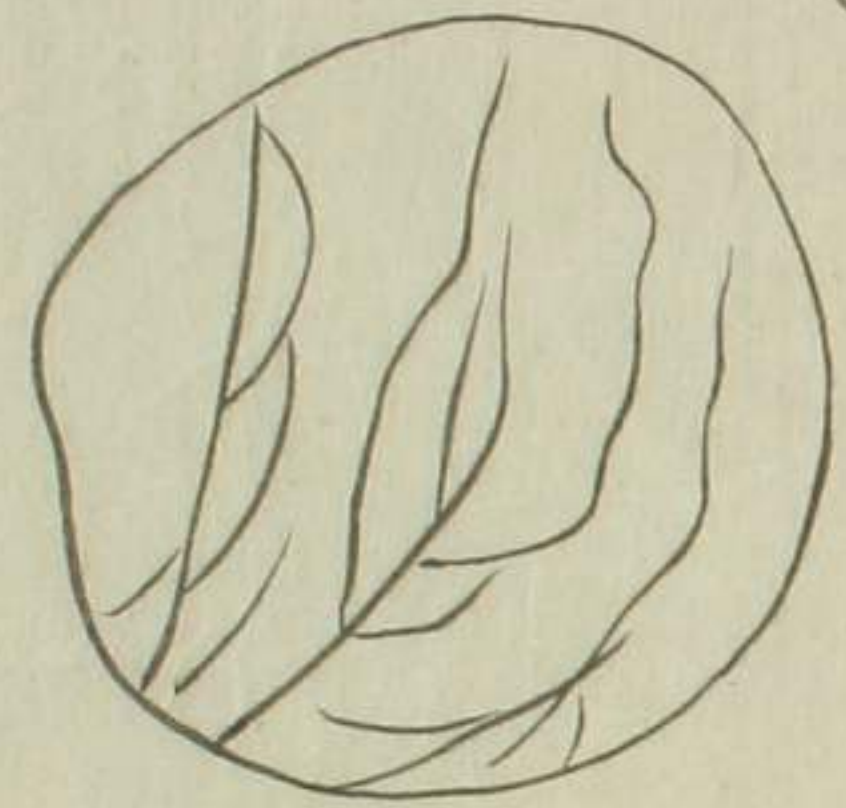
海帶根

海帶根ハ七崎の近海より二月に於て
三月にも出るものハ和島赤いんを石子
付らるるハちり控熱湯を灌ぐハ和島
ノ灰を能く洗ハ枯るるノ膠漆
のハ一蒸汗汁より却り騰れり
又醬油酒をかく油紙一紙を混りて
包ふ又干乾くを紙魚用巾の時熱湯
を灌きたくぐり或ハ乾きたるを末て
汁を和せらるる又乾きたるを油を掛け
包ふもまじ妙を好む所



牛膽南星

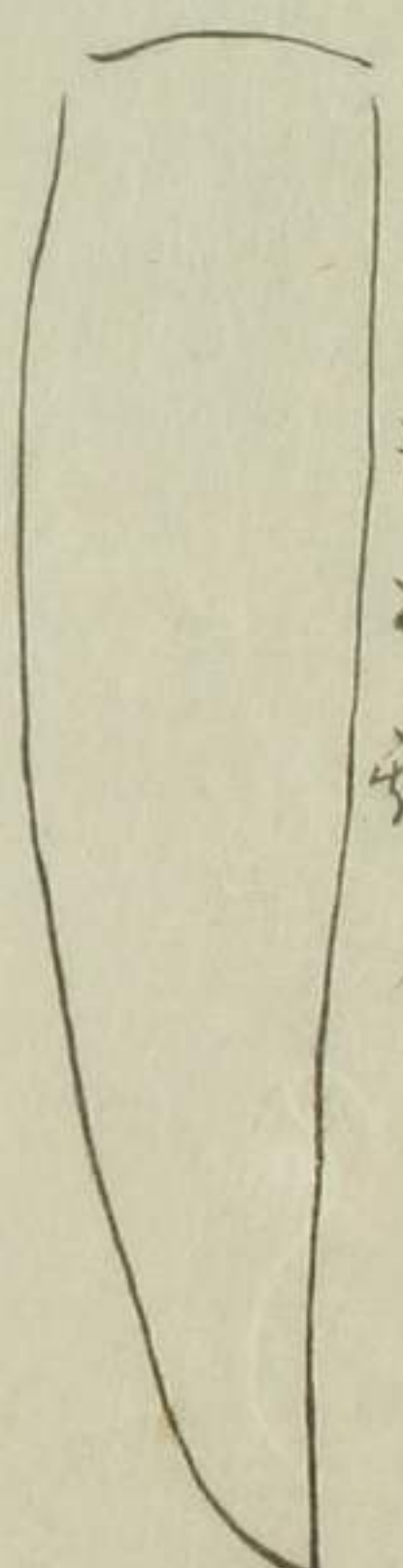
牛膽南星ハ蛮人の持渡物として其也微黒ニ其形成ハ其のよく或ハ球のよく
定りたるものあり之ハ其殼厚皮牛膽ニ天南星を調練して塊とす
たものも其殻分年久煮ものも以て極品とするもの効用一切急症痰喘息
迫り白濁ノ瘰癧腹用也



皆牛膽の
薄皮を以てまじりて
製するもの

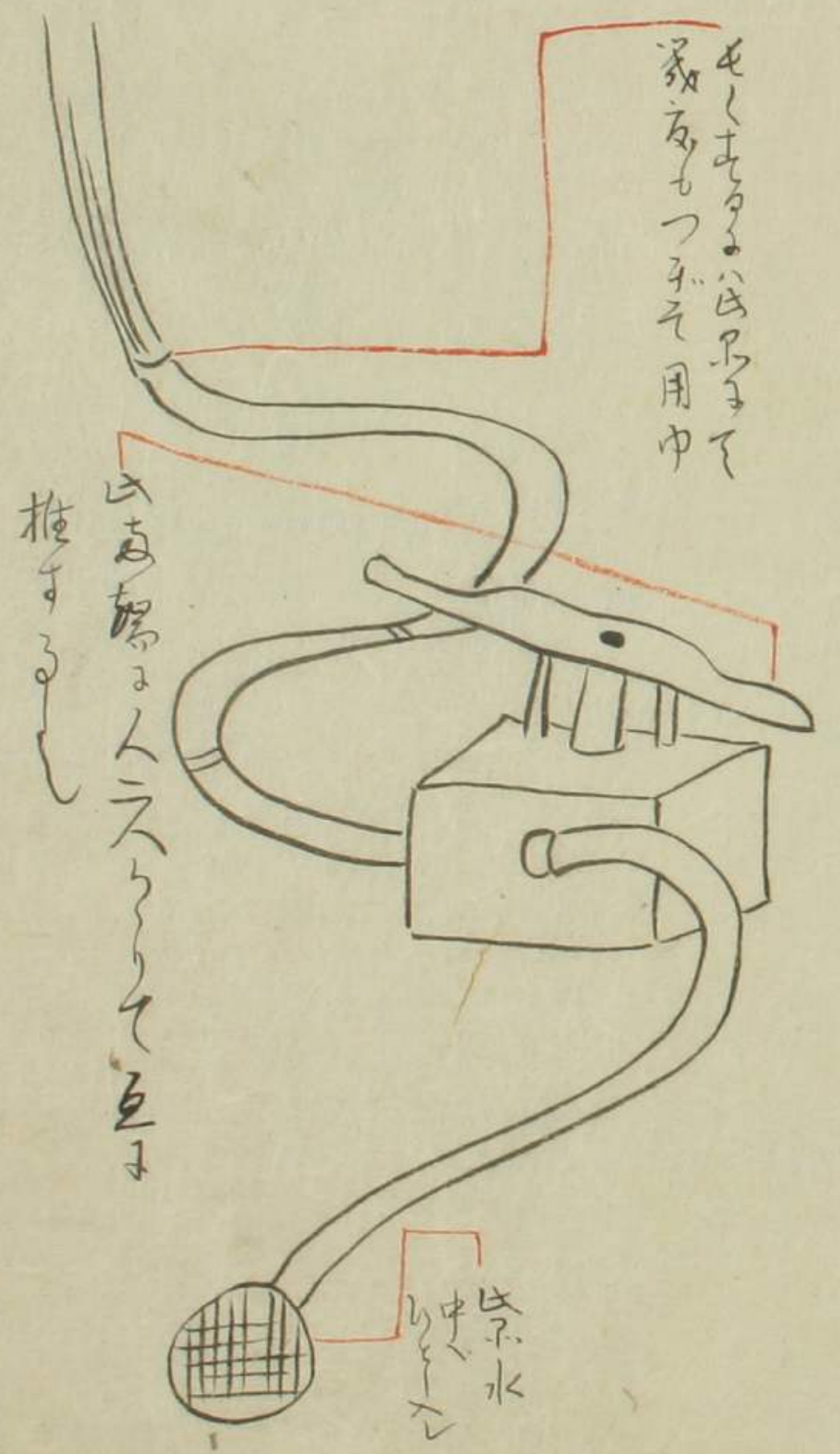
ちよろろとととと

ちよろろとととと 紅毛人 抄海 骨 茶 之 形 歎 角 の とと
色 所 仙 茶 子 似 たり 其 味 以 八 洗 あり 其 製 法 台 噴 あり
ざる 之 眼 用 先 熱 湯 を 搦 押 彼 志 ぶ こと を 削 入 次 之
鶴 子 一 箇 研 糖 少 一 以 三 不 味 茶 之 存 一 茶 を 立 る 柳 子 之
調 利 を 水 八 懈 眼 出 之 是 を 照 行 ぐ 一



形 之 新

水 揚 器 器



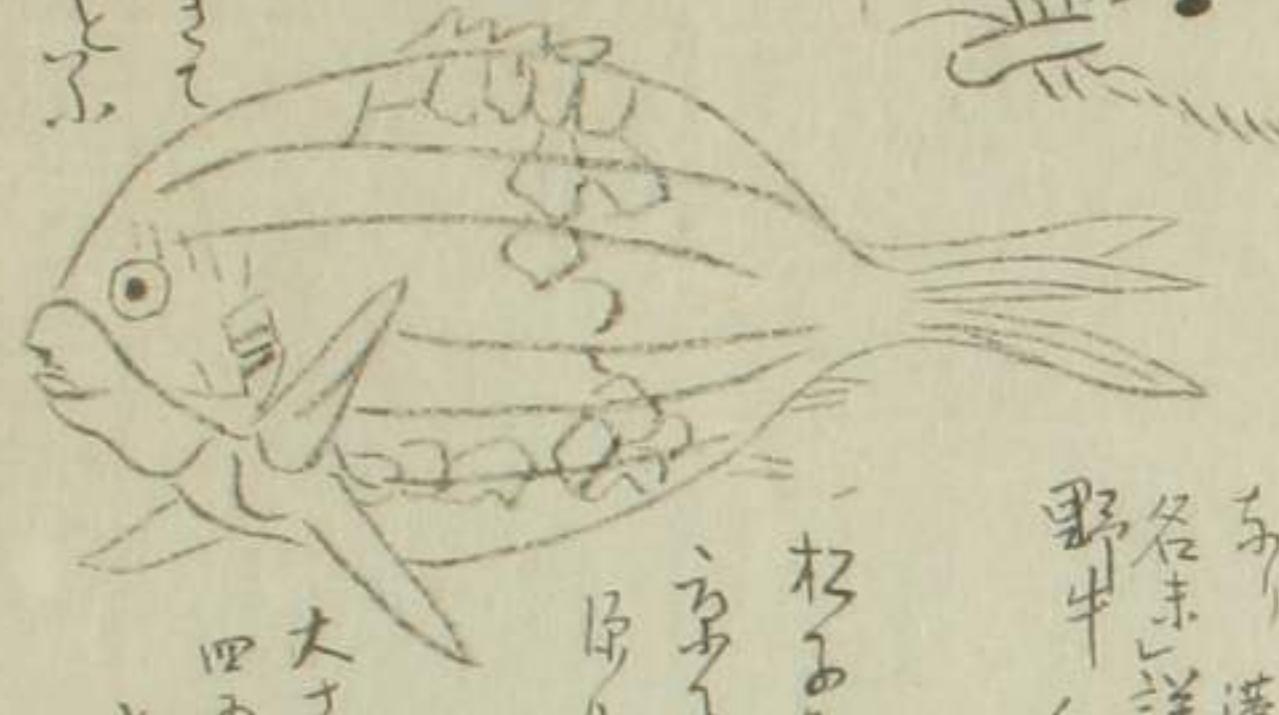
此 水 揚 器 之 形 是 也
其 用 法 亦 同 也

此 水 揚 器 之 形 是 也
其 用 法 亦 同 也

此 水 揚 器 之 形 是 也
其 用 法 亦 同 也

マツノウラ
松子 臭
松子 臭ハ七時
有、在、俗、類
六、角、の、色、
堅、皮、あり
ヤ、ク、皮、を、
食、小、味、ひ、
多、不

麝香
漢名
麝香



大
四五寸
あり

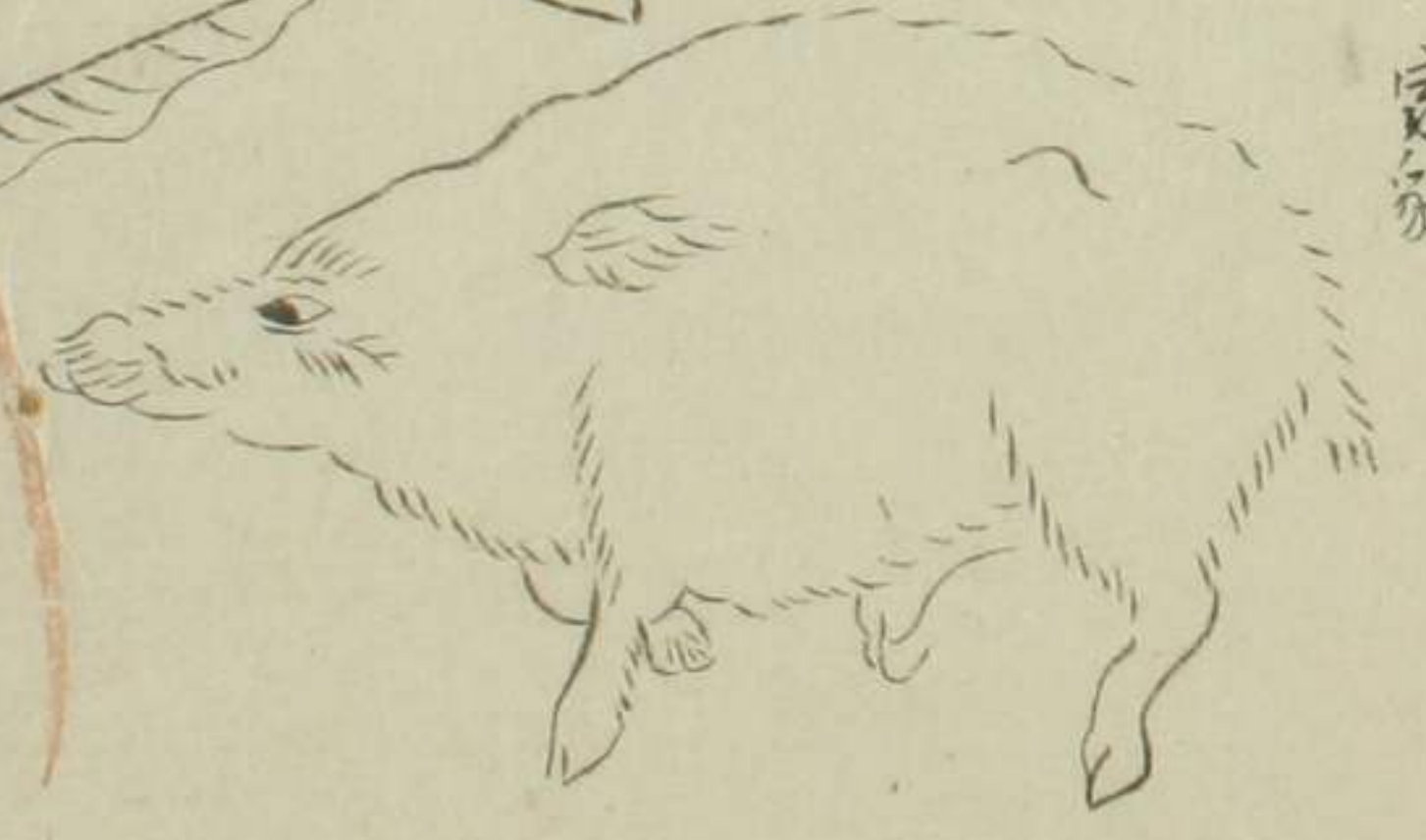


羊の類
あり漢
名未詳
野牛
和名也

松子 臭ハ七時
の、方、言、
あり、銅、む、
原、ル、と、名、
漢、名、不、
詳

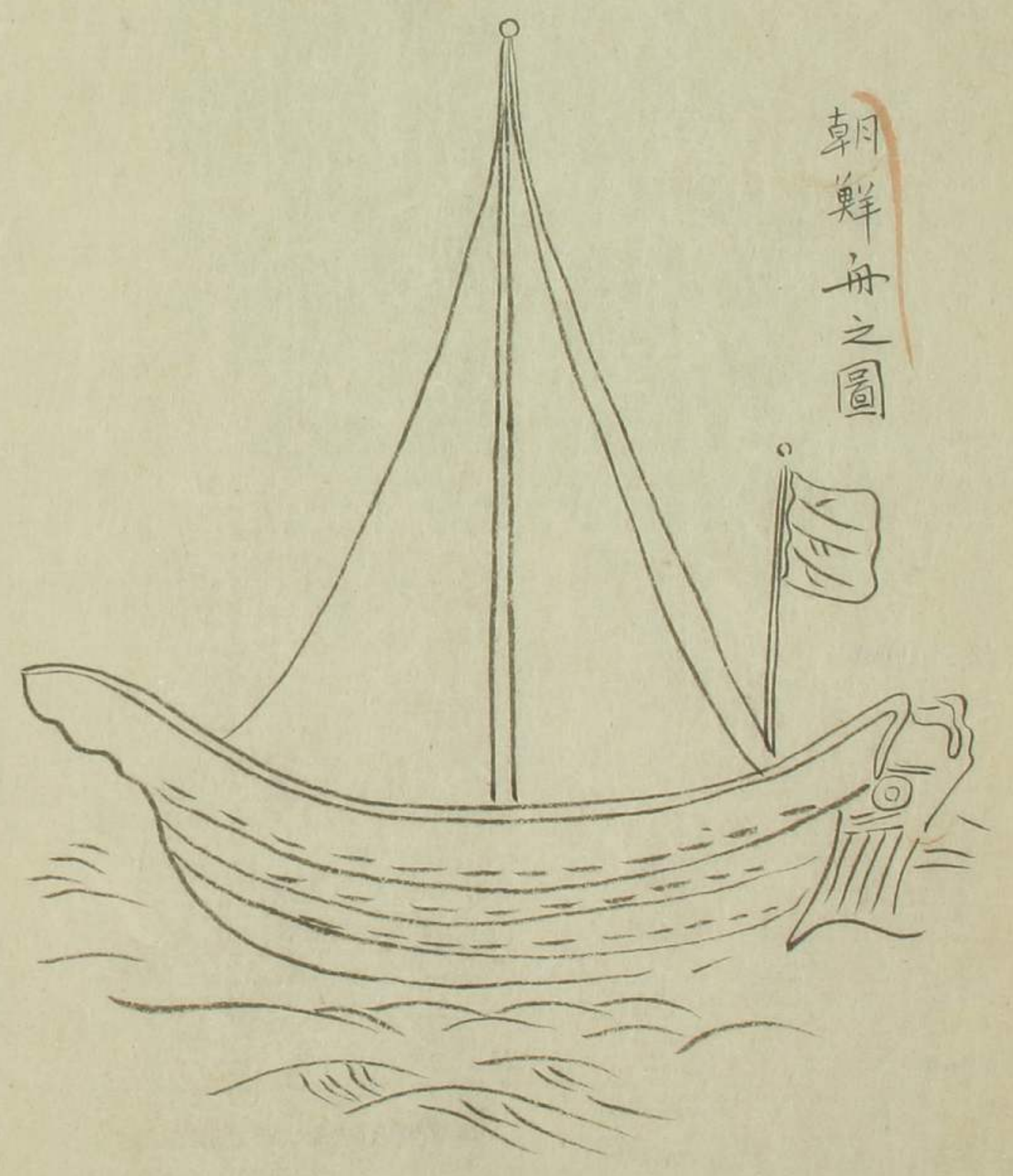


家猪



七時の人、
此、
異、
寸、
あり

朝鮮舟之圖



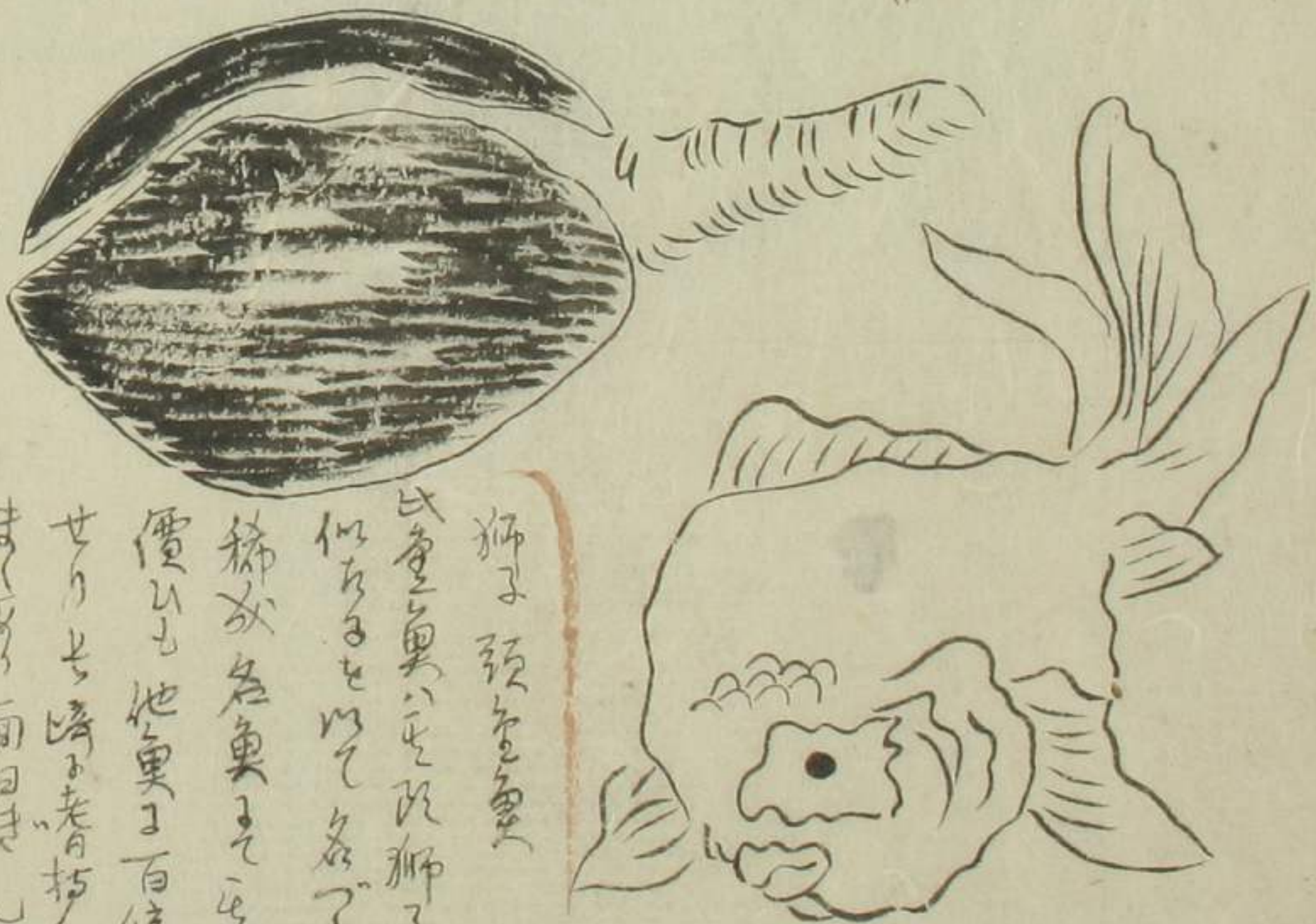
鳥骨鶏

鳥骨子鳥骨
鶏を老けて
飼ふ人多し
全く白毛
或ハ斑あり
冠足々
微毛を
帯り
以卵補
虚の佳品
よそに價も卵より倍まる



ひるこい

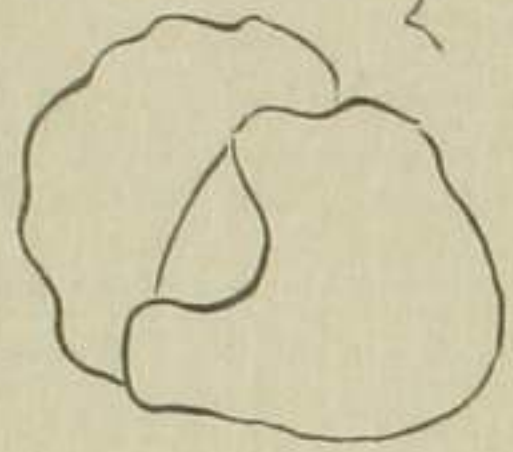
以貝殻の色もやんを標の方
とき肉より伸縮するは口より
珍味杯用者稀なる貝之はたふは昔より



獅子頭を魚
以魚と異は改獅子
似るを以て名
稀故名魚とて
價も他魚より倍
せり鳥骨者扱
まきや(面白き)

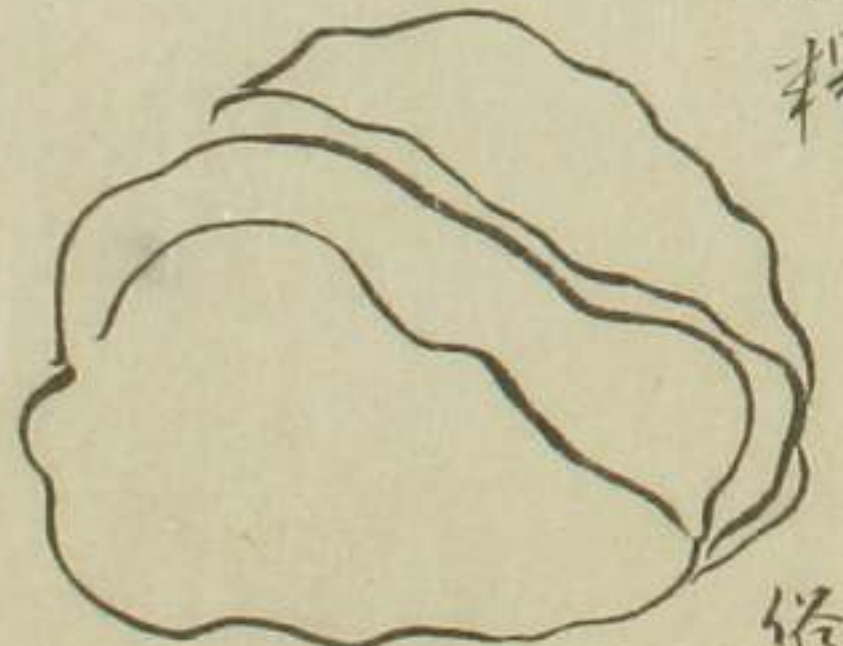
名山貝母 唐人持料

白きり雪を欺く
大ききもの
さきりかき



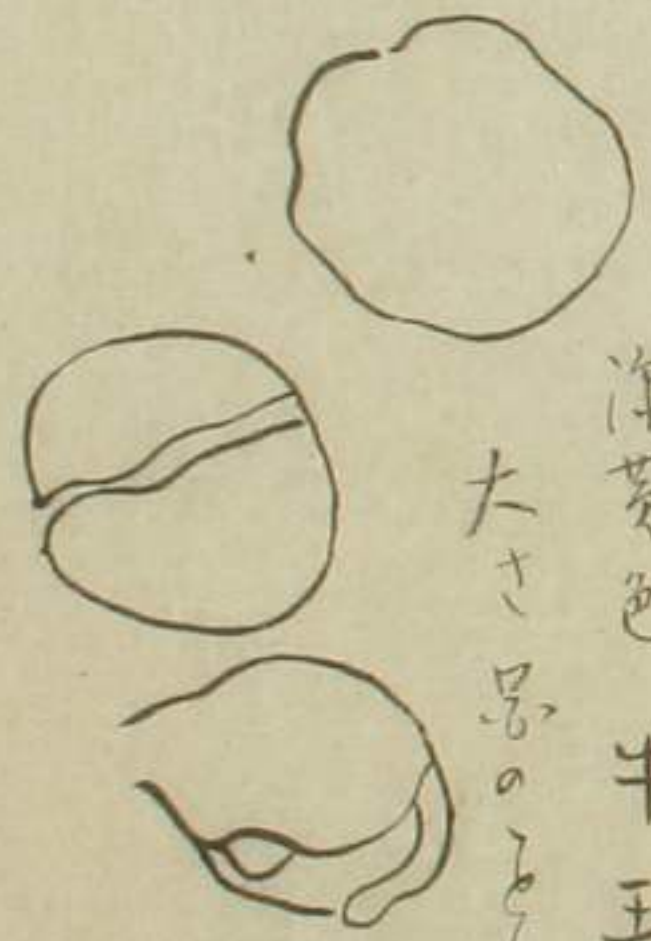
唐魚餘糧

外面微
黒色
内裏微
黄色



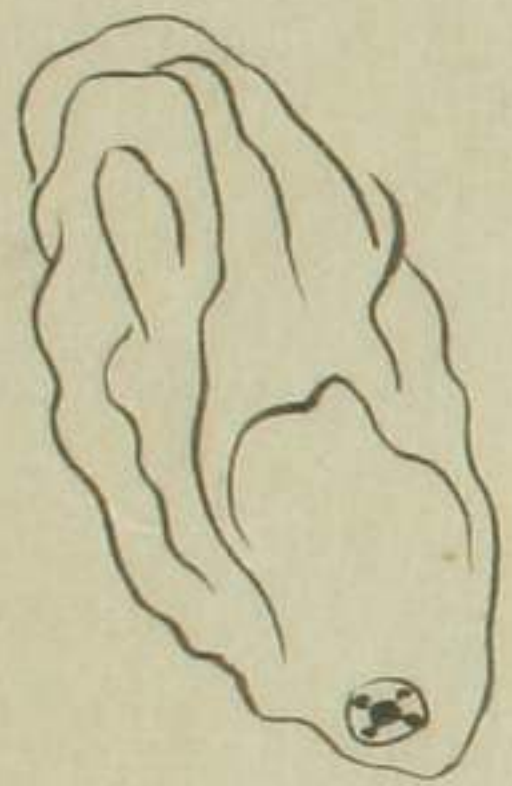
俗子
イレーナ
ダゴ
又名
バツタイ
イン

馬勃 和名ヤツタ



深黄色 牛王に似たり
大ききもの

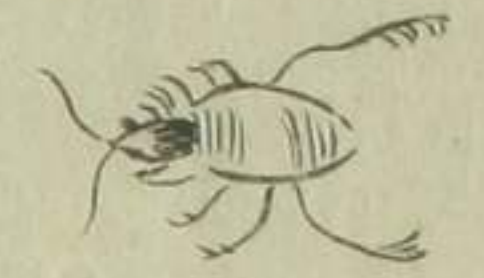
木瓜
此色此味
言況まへ



唐斑猫
色微黄



和斑猫
色黑



俗名ダイタウトホリ



石莫微黑色

木織石



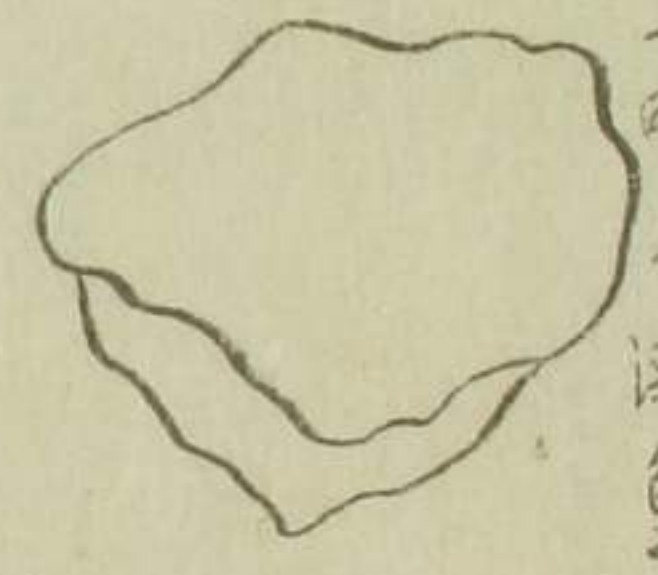
漢名鴉管石
白色

燕窩高其茶 俗名エリス

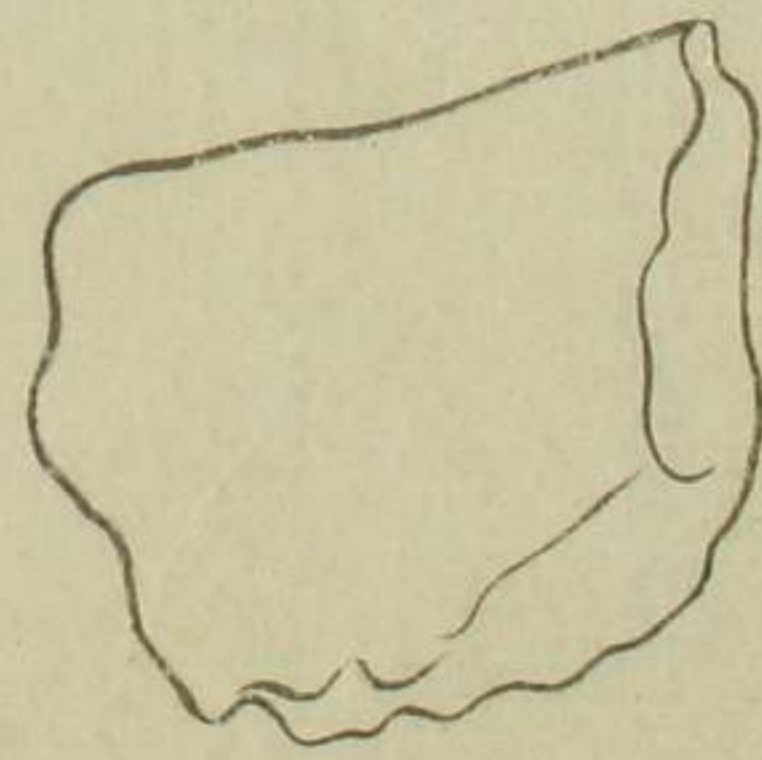
定人洞法して言ふ
松十ハ必に用南
海島石の石よりの
燕白藻を合せ
法を叙あり色
為るく黄を
帯より 此で膠取
子似りあるのみを和しけ用中



漢名鳥石
里曜石漆色



桑石
コト茶色



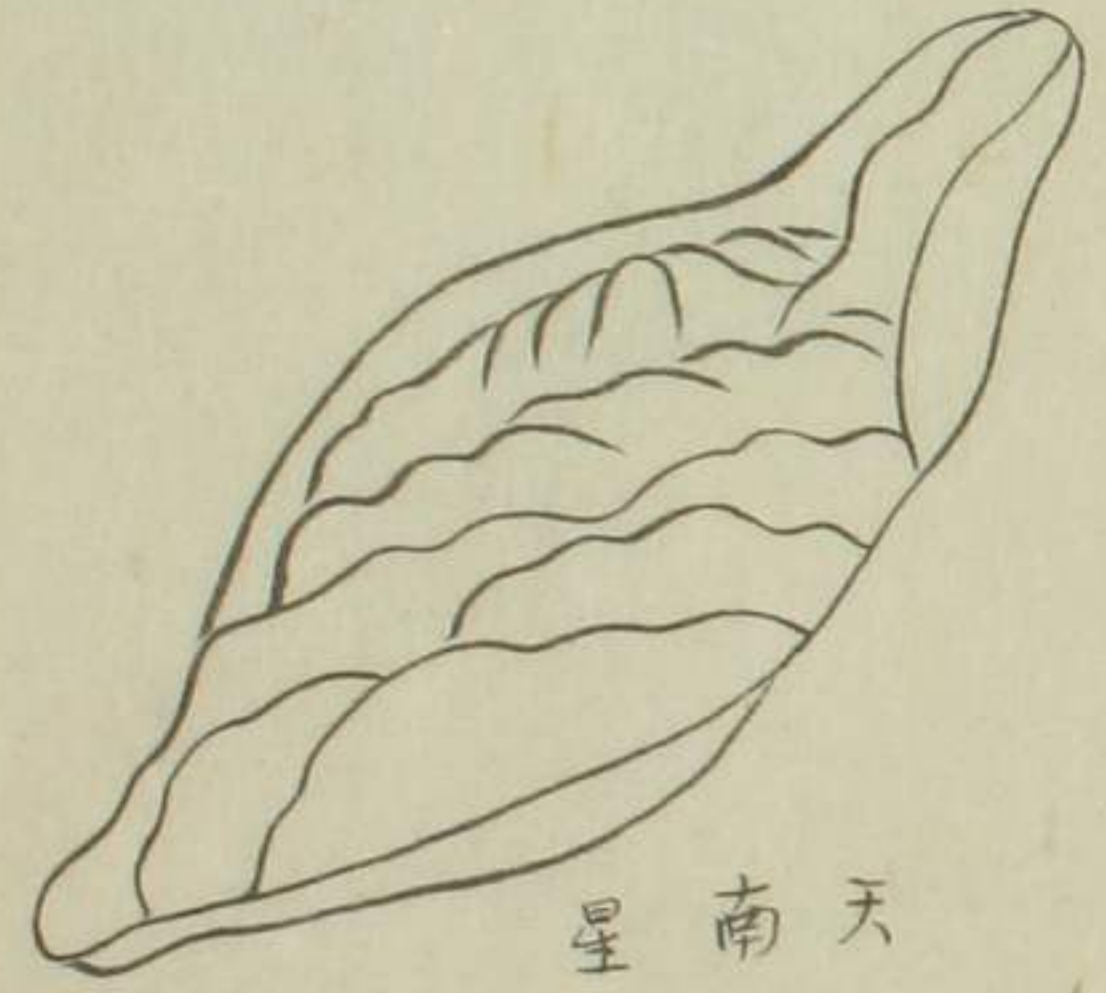
千里茶

千里茶片形 降丸の大小に 湯を解する
好く是れ 胸中をこらよく 又丸を
下し 丸をよむ 丸をよむ 丸をよむ
懐中 丸をよむ 丸をよむ

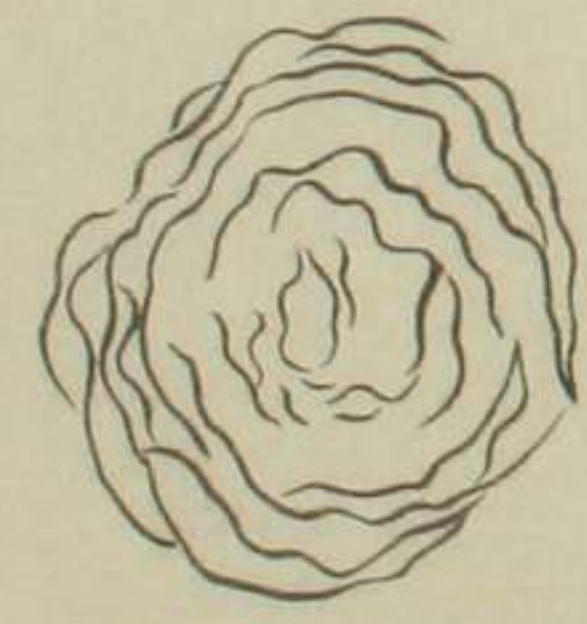


斑紋花

木綿二種あり 一ハハ
樹子似り 一ハハ
似る 敷を二ツハ 割ち
是より 内ハ綿 内ハ綿



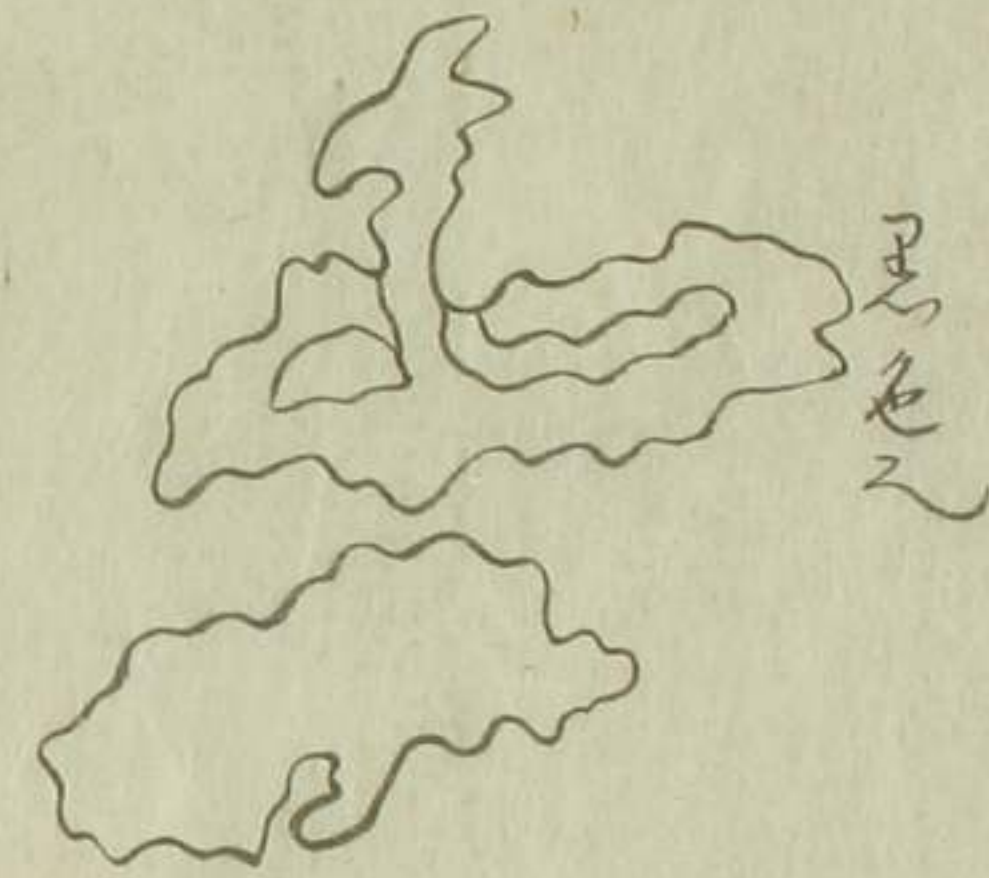
星南天



唐人粉料の

漢名鐵樹

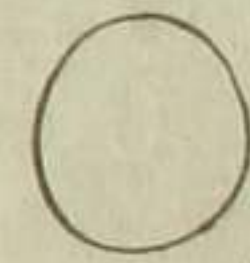
海帆



黒色之

寶石

片也

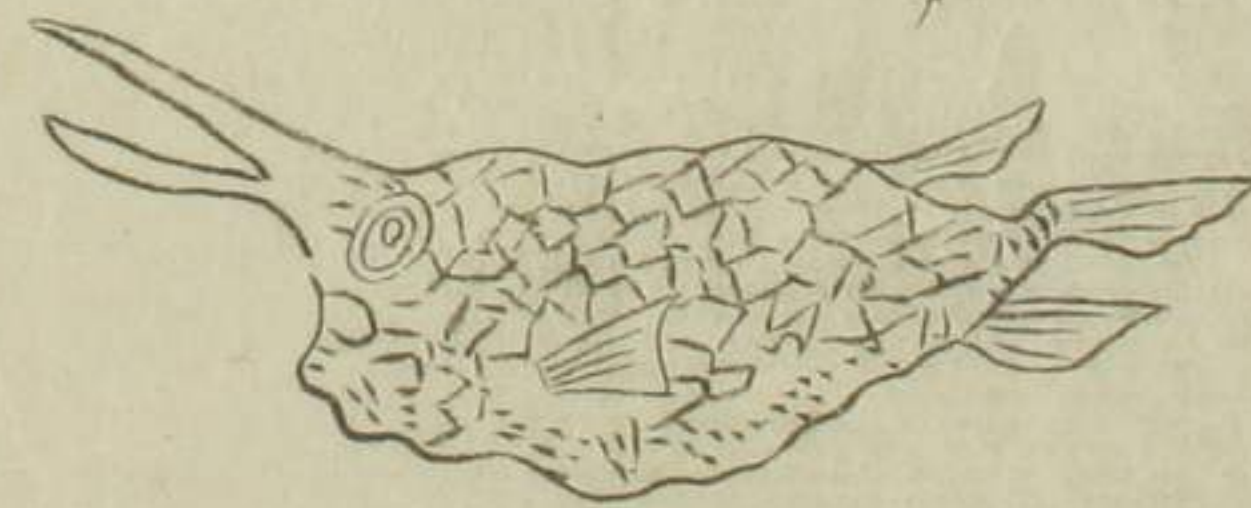


和名

ウミスガ

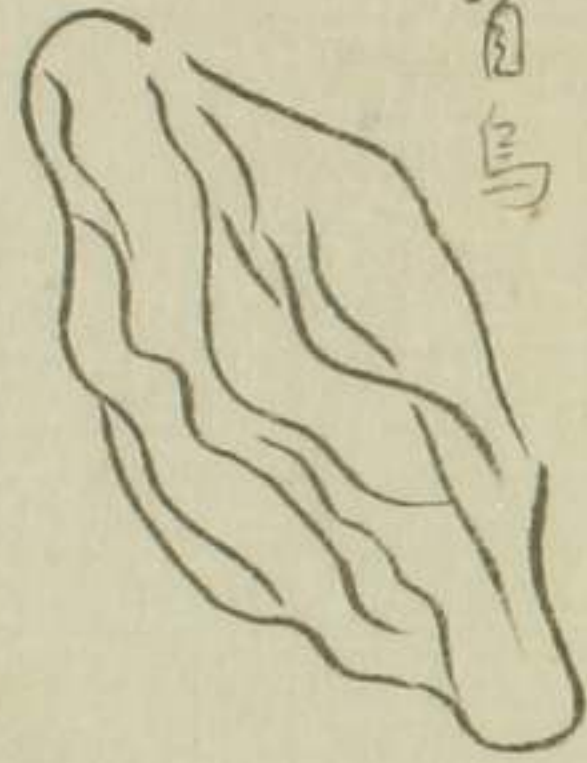
海牛

微黒青色
を帯

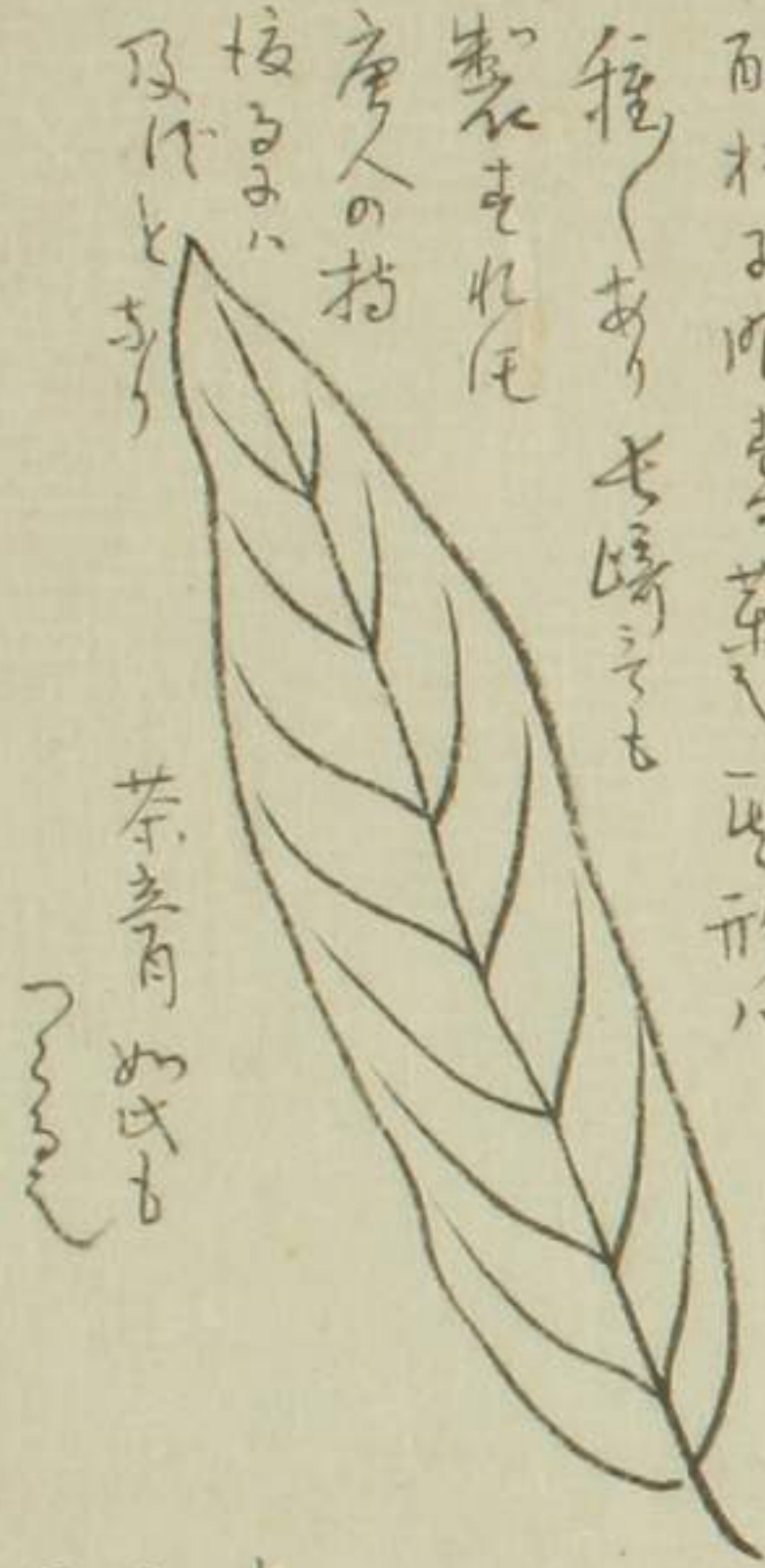


唐人抄料の何首烏

茶膏



茶膏ハ第一鬱氣既痛又酒の
酔杯子所を茶一其形ハ
種々あり七時之も
製を此に
産人の指
板のハ
及けとあり



茶膏如は也

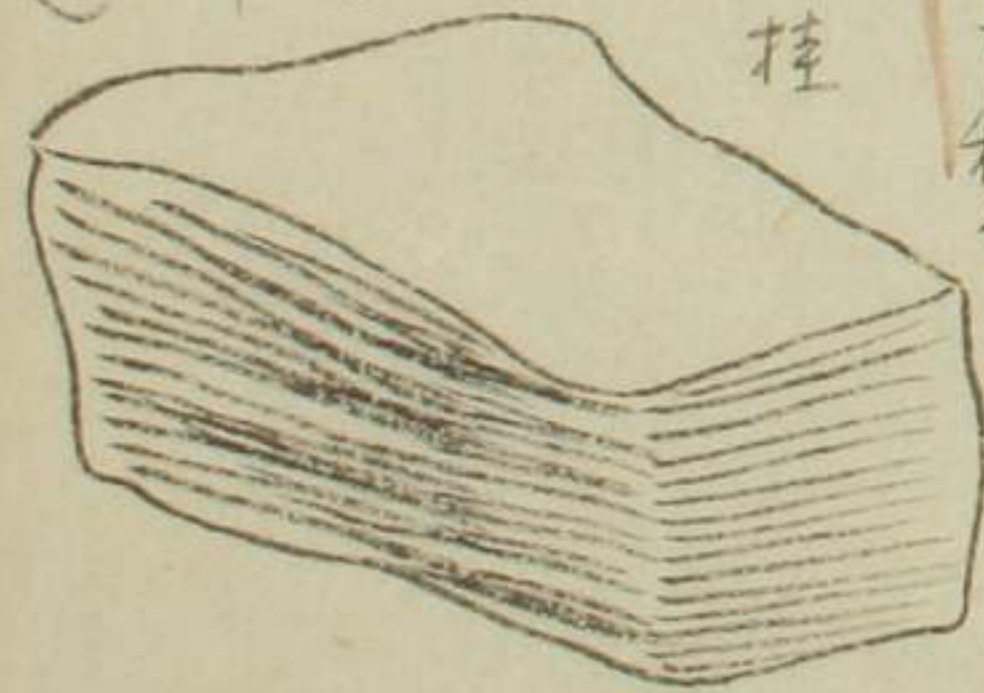
玉人參

玉人參ハ其形
渾丸のとき黄
色明瞭して
其を切ると
多々羊角人參の
膚肉に似たる佳子の
人參之を時ハ極小
昔時皆ありたる也稀也



文趾肉桂

肉桂上品と云てハ
細くハ稀ニ
又ハ如ハ中品也
錫の蓋に入候も
糊封しとらハ中
品也一斤一
カラム程也

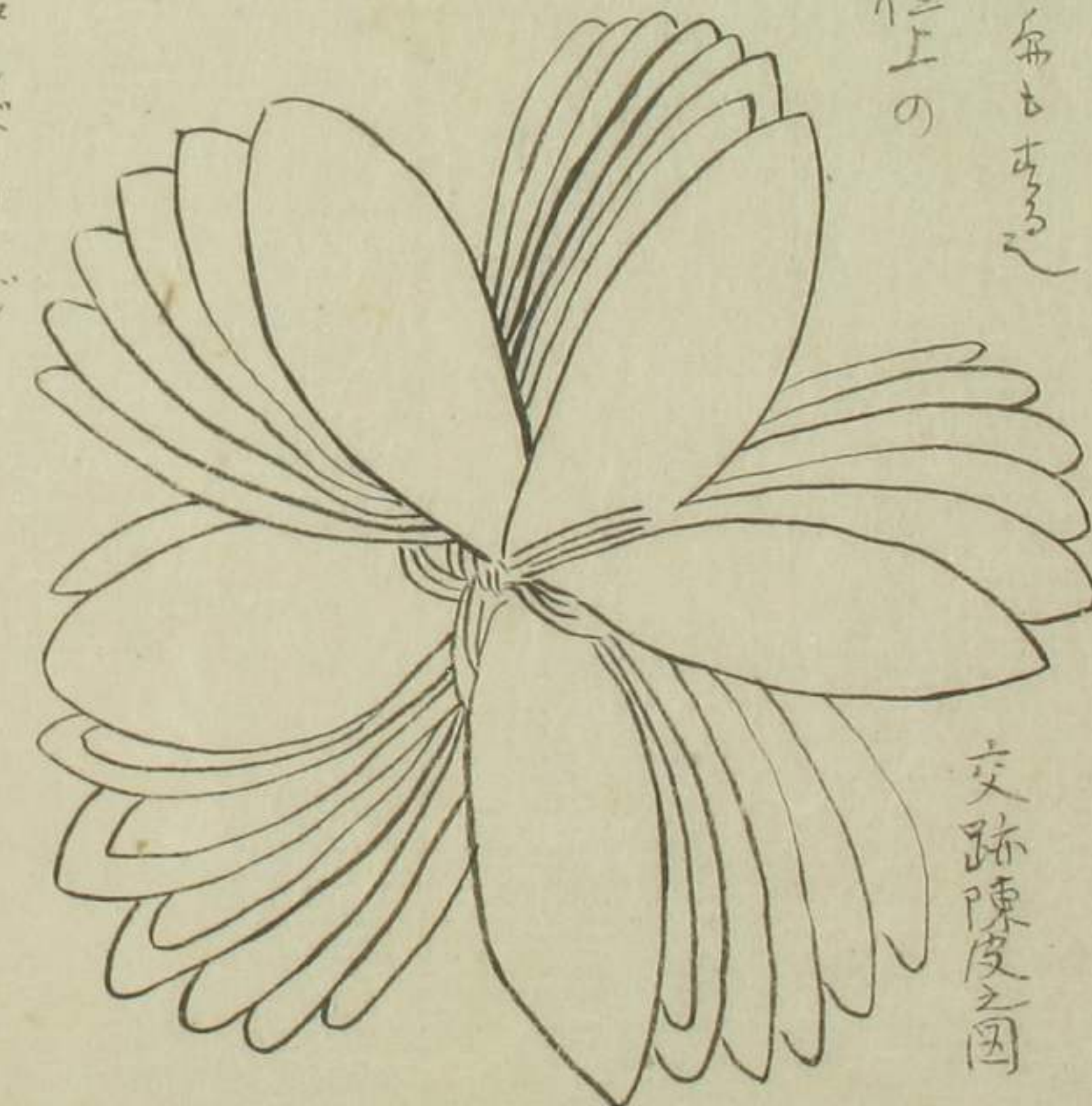


交趾陳皮

交趾の陳皮ハ唐人の好む之唐人を以用も抄表を製するに於て之を以て
皮を五つに割り厚く白肉を去り二十重に紅する 諸書に五つに十字字に
拮索志に物之に價一斤二三十兩とある

唐土より王侯大人の用ゆる極上の
いとつてハ價百七十金也
まるとさふと氣味兼香
其者の形ありてはと
陳皮より極上の形ありては
余も日本貴賈のありと
唐人持料ハ雲泥の遠い
ある之形を以て記す

漢名宗橘 和名ベニカウレ



交趾陳皮之圖

夏草冬虫

夏草冬虫ハ唐人の持物の茶物として留茶一草として唐人
いらし大切に陳皮物もこれに以て人ハ不念もゆきて 價を昂く目
より杯をこれハ唐人よりハ物物は茶葉より本草を余古書より一向
見へざるもの之を効能抄もさるるまふさうなるるまふと書隱葉
説とて清乾の作を種々の子を集めたる大を定るは中
よもり今在又其本文を程出して考校し何れ之今古語の人
此を冬虫夏草と稱され在彼草より夏草より冬虫と出せり
昔有友人自遠東餉予三物名曰夏草冬虫出陝
西邊地在夏則為草在冬則為蟲故以是名
焉浸酒服之可以却病延年余所見時僅
草根之枯者然前後截形状顔色各別半

夏草冬虫之圖



微黄之

微黑之

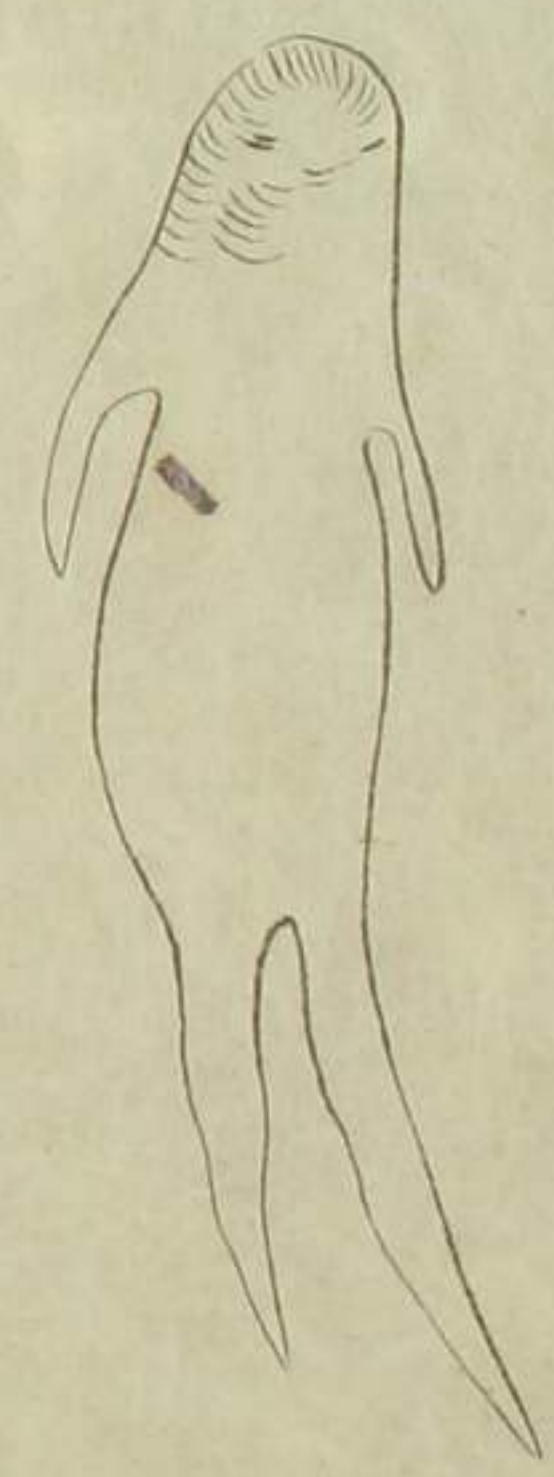
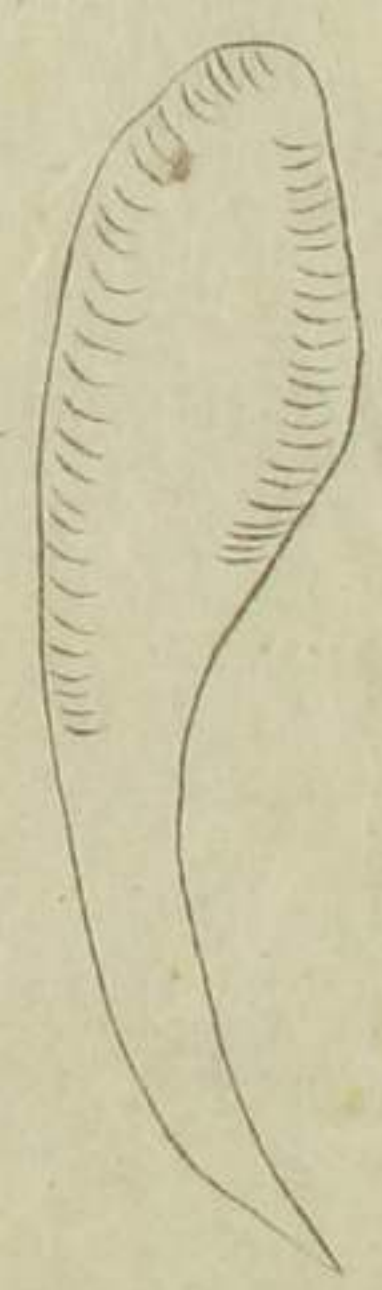
青者僅作草形 黑者畧粗大 具有蠕蠕欲動之意 不見傳記書之以俟後考云

鳳凰城

鳳凰城ハ人考の極西之朝鮮
龍頭山あり其山の南に産する人
考之此山の北に産する方より産する人
改り之

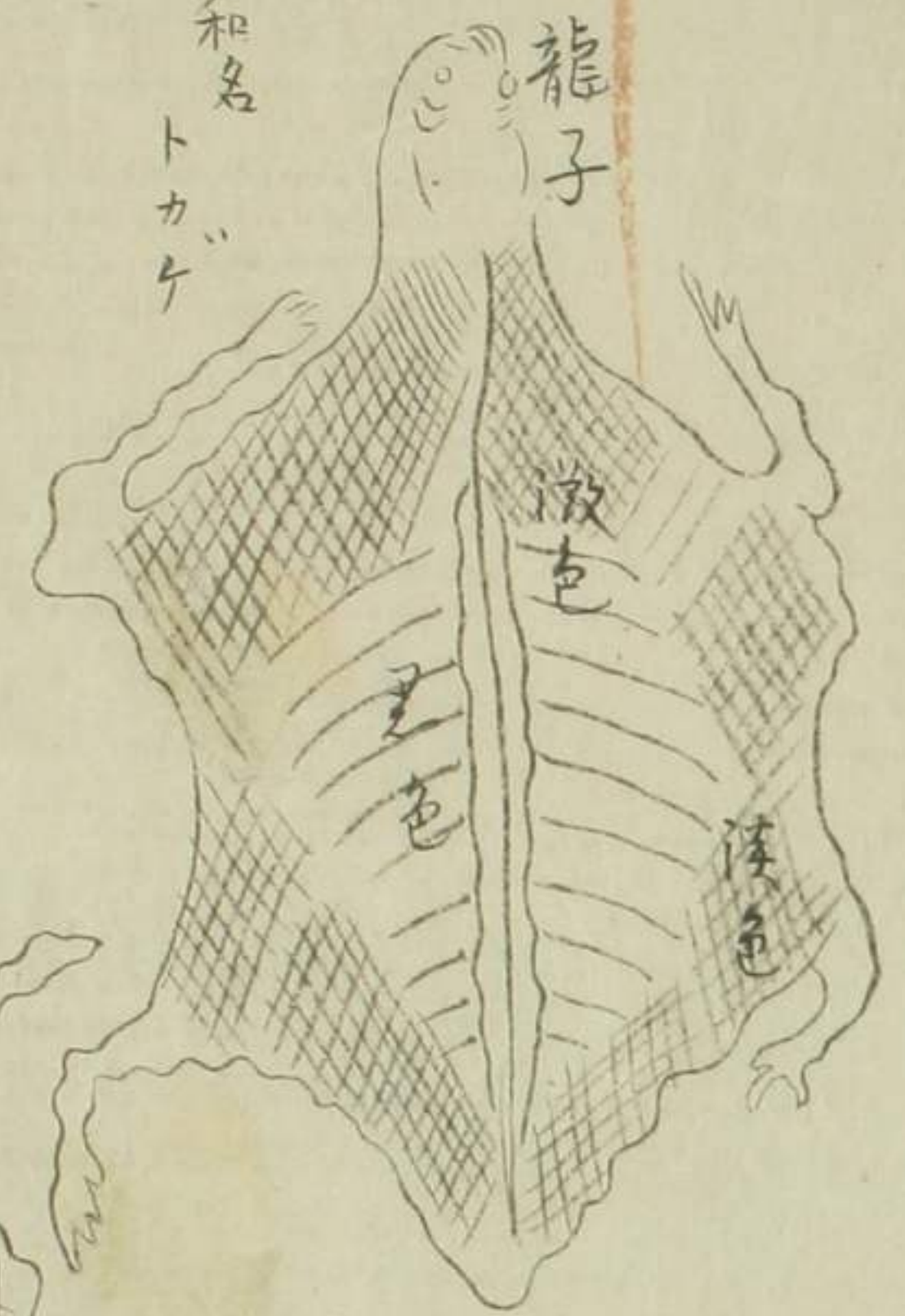
羊角人考

世人考も唐人の持論のもの
佳不之上考も肉ありの徹して
琥珀に似たり何處地より出るものと知らるる

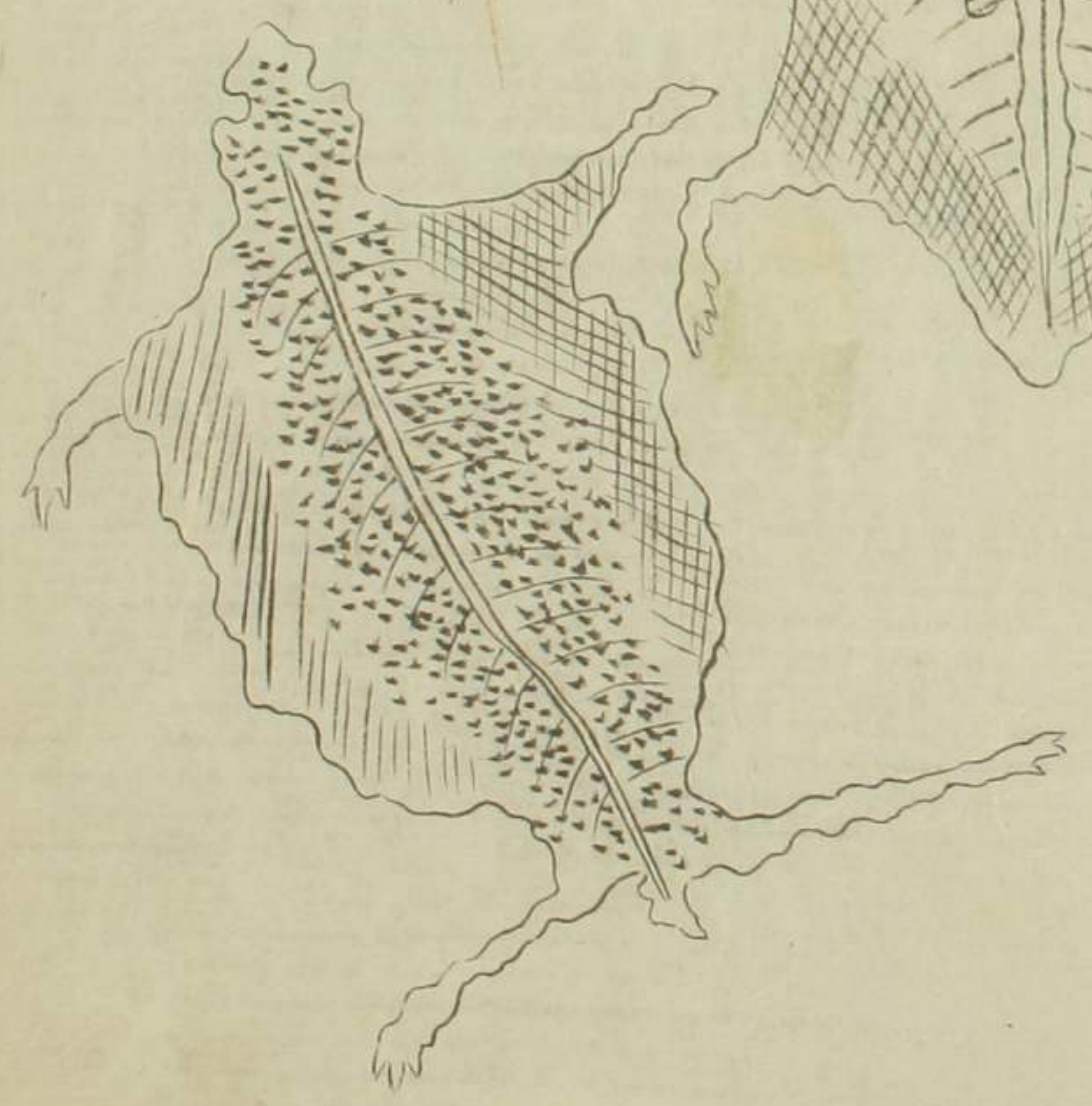


石龍子

和名
トカゲ



蛤蚧



蛮犬



漢名蛮牛
爆牛

即
犍牛



蛮國の水仙

阿蒙陀水仙ハ蛮人持候水仙其根平々
似ル鉢ノ水ノ根を浮して養ふ事花を生ず
水仙の名ヲ當りたる也

水仙之圖

漢名日下香

蛮名ナフトル



大海奇物

仁魚

仁魚ハ大魚ヲモテ其身廿四五丈有リト云ふ一魚ノ魚ノ名ヲ云フ
トモリノ仁魚其ノ能ク舟ヲ保シ渡シ一魚ノ名ヲ云フ付テ
一モ或ハ魚ノ名ノ仁魚ヲ食人ト云フモモリノ魚ノ保シ渡シ
云々ト云フ一モ
其ノ名ヲ以テ漁人
ハ魚ヲ捕ルルヲモ
林手ト云フト云フ



仁魚

飛魚

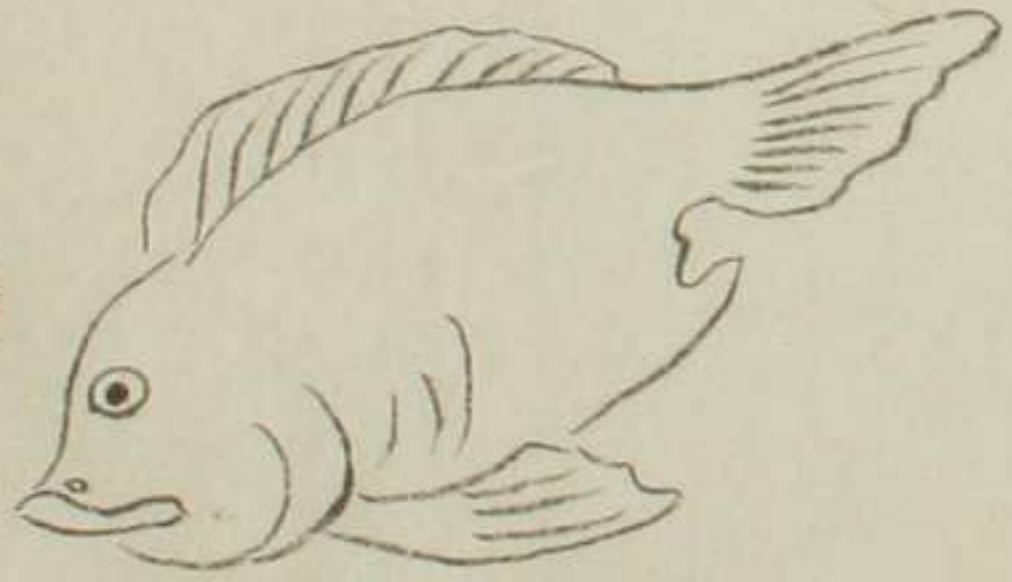
飛魚ハ其ノ一ハ汗多クノ一ハ水面ヲ飛ビ
或ハ大魚飛魚ノ名ヲ食ヒ口ヲモリ
喰見ト云フ
一過ハ一魚
ハ一魚
昔時 紅毛
人ノ舟ノ飛メ
ト云フ其ノ
一ハありト云フ



海ノ里ノ魚ハ其ノ一ハ汗多クノ一ハ水面ヲ飛ビ
今此水昌ノ
一ハ身色物
随ヒテ映徹
たトハ石ト云フ
一ハ石ノ色ト云フ
一ハ葉ノ色ト云フ
一ハ葉ノ色ト云フ

海ノ里ノ魚

海ノ里ノ魚



ラガル

ラガルの夜と海牛

は居る七寸許尾七寸

鱗甲の堅き石より

味も強又硬なる事能く

遠征のよく足は鋭き爪有り

其性にて種を法魚を食する時

陸に登り敵をたも進ふ又人を喰ふ只れ也

海を以て動物幸ひし逃げて海中を其の疾く走れ此又細小

の魚を喰ふ故に小魚殺る種ありラガルの陸にて他魚を食せら

るの害を避く事を生むるは大き鶏卵の如しと云其陸より



涎を吐く大毒ありて人畜誤りて死す即ち死すはラガルの
言き多ありて人を見れば怒りて叫喚を只其腹に二人許軟なる者
一魚七寸三寸名を忘れりラガルの腹の下を刺して殺す又陸
より一奇物あり形嵐のとき物もラガルを大獣の口を開くを
伺ひ忽ち死す又喉腸を喰ふ法大物先子進めれば昔もして
皆死す又雑腹葉といふ物あり夫毒人は毒を捕まはラガル也れ
東トヤリ

落斯馬

七、四丈許前子短き足あり
海面に浮く出る事ありと云鱗甲

実堅

了て刀劔也

破るる事あり

額角は五角

あり曲る事

釣の事

以角を装

石を懸く

寐るといへり



航魚

如甲の如く大さ僅か五尺許
甲殼蛤ト似たり六足あり

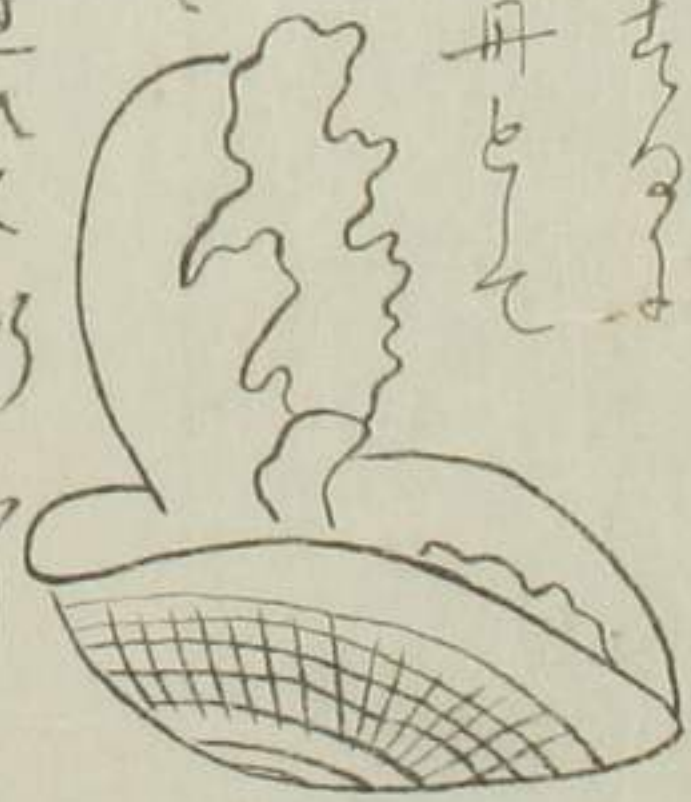
行んと去る事

甲殼を舟とて

是を

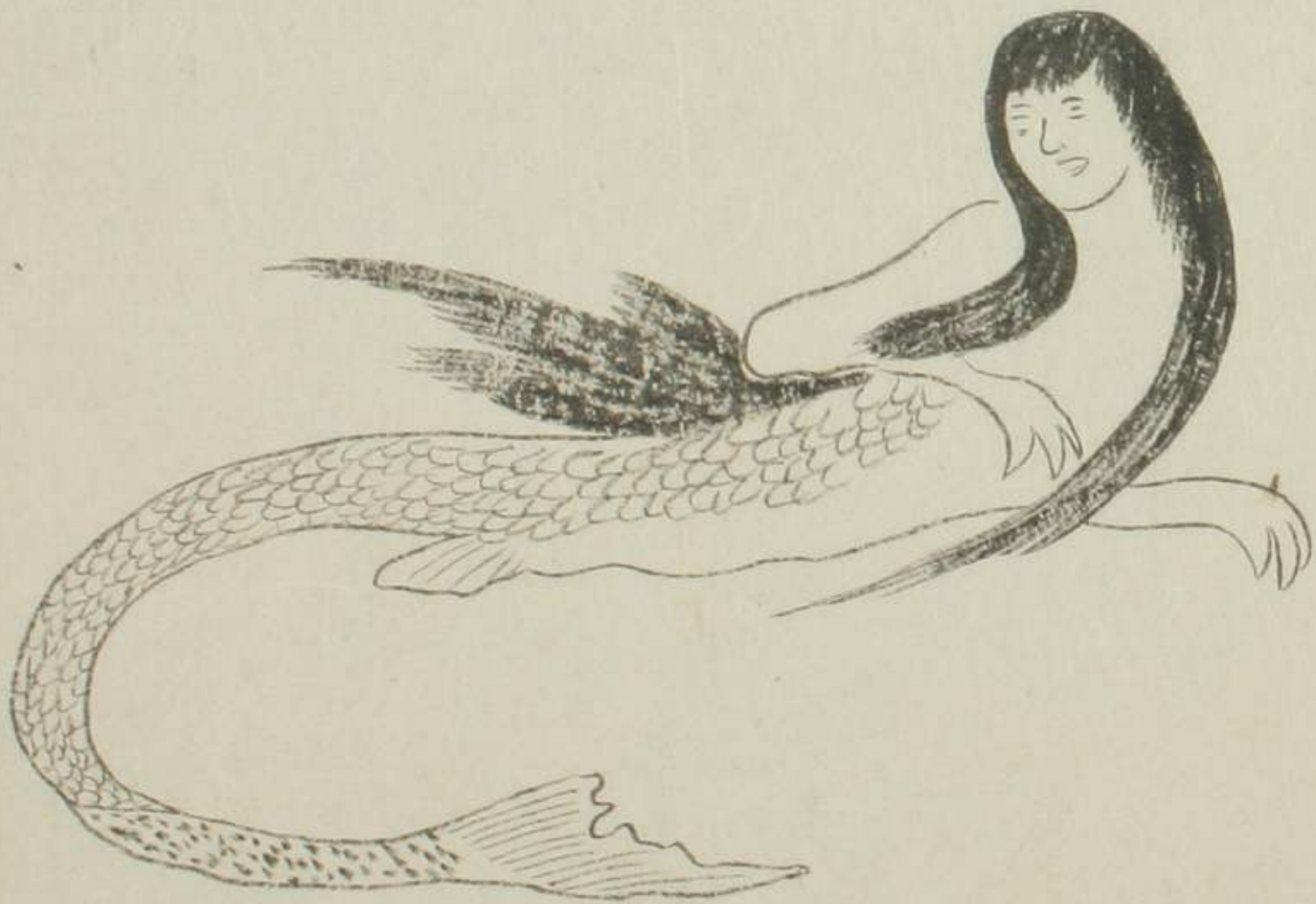
帆として

流に随ひて行る事



海女 人魚

半身以上ハ女人ノ如ク
半身以下ハ魚ノ如ク人魚骨ハ
而能下血を留る事あり
兼活よペイロトルと心ふ
紅毛人持する事あり



海人

全身に肉皮ありて下は垂るる袴を着るるに似たり
 其の余の人袴は是より短し是皆水うきあり
 陸地より入りぬる者も死せざるものごと



のせとすや

のせとすやふい天竺製のものなりて其形角ありて大なるは素が
 金糸の衣なりと云ふ物なり其を碎くは蒸氣を撲つ其
 體節若牛王杯のやふに一毫くとすといて其一毫くとも
 比る金糸の衣をけたるもの人効験をえを回復する人考
 する候あるは髪を以て一切の急病は之を削りて白湯を
 もつて送り服は紅毛人稀に持候るものなり其價珍
 貴第一の薬なり

のせと

沈み

蛇頭石

蛇頭石ハ紅毛人持帰るもの云ふところと云物にて紅毛
 虫の咬む處に石を附ると毒を去るに吸附て離れ
 るに自然にもちれるものなり乳汁に浸すと須臾
 して毒乳汁は出る更に清水をよく洗ひ日干し
 再び之附ると物質造るもの鮮うと云七峰林葉の七峰は
 秘する所のもの云物之白色にして思文あり其形を
 蛇頭



漢名吸毒石

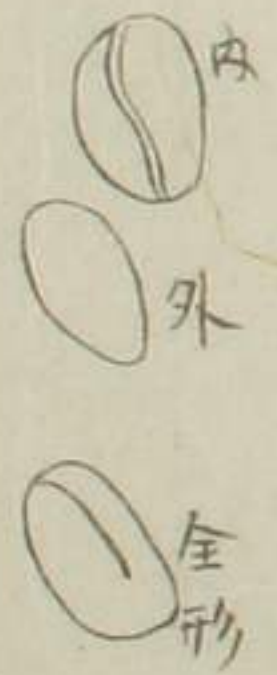
蛇旦月で七吸付
 毒を去る也



つうとろくとろつとろ

つうとろくとろつとろ人の持帰る疾切りの漆色にして甘味なる物
 其味は此石を煮て其汁を飲ると青と成りてよく痰を化し
 痰を湿すものなり

つうとろくとろつとろ 平胃散痰若飲るものにてを効あり
 かつらひは毒人葉飲する更にして其形白扁豆のよく湿り気ある
 物のものなり離れ去片と成りて其色を黒く成りて
 日本の子茶をのちてとろつとろ 眼を治る也
 其効眼を治る也一箇飲を消し気を取る
 よく小便を導く胸癥を快くすまを以て



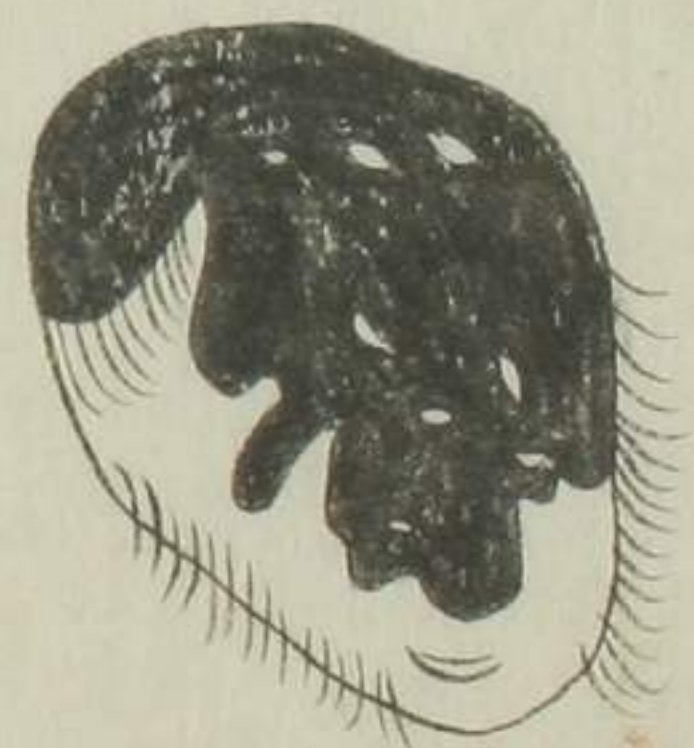
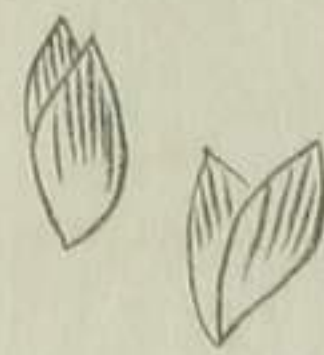
内 外 全形

土らつめ

ころつふハ垂人硝子の口極まき
ため持造るふしうて和ら放木
湿氣をぬきを登つふしうれを

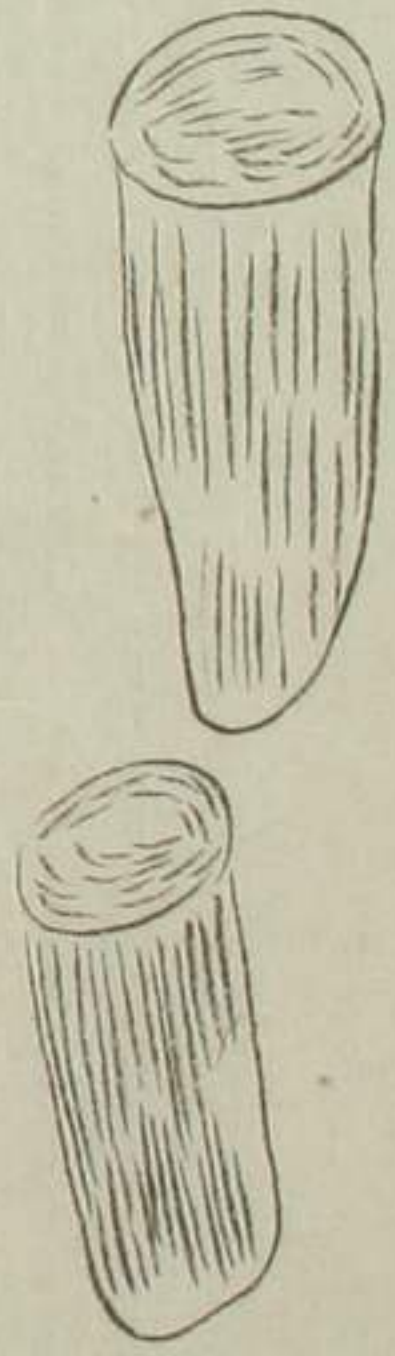
もつた後佐利杯の口夫以上もまきもの
是を切ら利刀やあのおまあ
さ此ハヤうけて切れがくく或ハ砥石
ミカキ
麻石よきうけんうも物の口と
ちまきん

紅毛縮砂



かくあま

用法は法未洋



かい魚

長崎の人らめとつ小鯨の魚
肌膚鯨のそくそ作蘇ナギ

漢名犁頭鮓

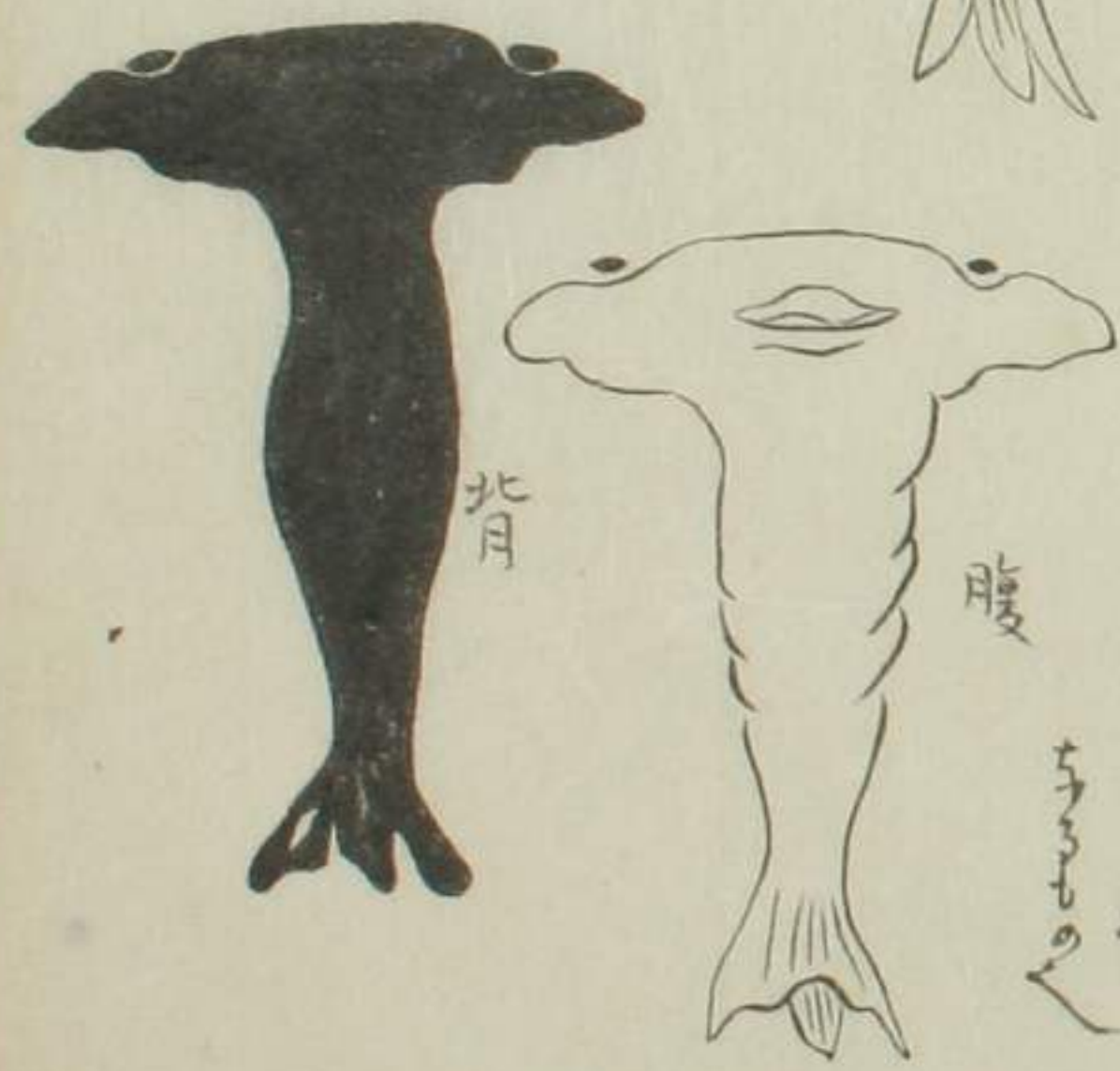
きたし



鐘木鯨

七崎の人ま
うせのふと

漢名 雙髻鮓



七崎の人
きたこと小
形蛇目
似て黄色
味ひ
まてま
ちまきん

舟揚り之忌

舟菩薩の古文

長崎にまゐる唐人菩薩と天舟神あり
 姥媽其之傳々昔時福建興化の林氏
 の娘大海子没して神と成神異現を
 海陸を護るを天妃と比し聖母
 曰号に觀世音の化身なりと云薩摩
 の玉置に權現の即姥媽神あり
 野間ハ姥媽の和産あり唐舟
 七崎へ付ては舟神と唐寺と稱る
 其故よりト梓つらいと云者あり



梓をさるる
 是邪
 曆九己卯八月山尾春昌寫之



鳩溪平賀國傳稿



